
新・朱色の君は冬空に歌う～red&snow～

汀

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

新・朱色の君は冬空に歌う〜red&snow〜

【Nコード】

N7192A

【作者名】

汀

【あらすじ】

オリキャラ多い、汀の『イロ者少年少女シリーズ』。黒の組織壊滅後、ある冬の朝。松本警視は、10年以上前の失態を高木刑事に語ります。語られるのは、当時は警部だった松本さんと、ある女の子を巡る記憶。当時と今、警察病院で何があったのか、誰が消えていったのか。想いは時の中で交差します。

序話 13年後 過去の追憶

黒の組織壊滅から9カ月後 緑台警察病院

冬の朝。

雪が舞っている。

暖房がきいているこの警察病院からも、その様子は窓から見えるわけ。

ある私服刑事が入院している病室の、すぐそばの廊下の窓。背広を着た大柄な男性が、花束片手に雪をながめていた。警視庁捜査一課の管理官、松本清長警視だ。

「……」

その廊下を通りかかった高木渉刑事は、窓のそばにいた松本警視に気付き、立ち止まった。

高木刑事の目の前にある病室では、捜査一課のベテラン刑事が職務中のケガにより入院している。

花束を持っているということは、高木刑事と同様、警視も見舞いに来たのだろう。

「管理官」

高木刑事は呼びかけた。

周りに他人はおらず、声も間違い無く聞こえたはず。だが、警視からの返事はない。

「……………」

「管理官？」

「……………」

再度呼びかけた直後、松本警視は勢いよく振り向いた。それも、はつきりと驚きを浮かべた顔で。

「管理官……………」

高木刑事の恐る恐るの質問。

松本警視は頷く。

その上で一度咳払いをして、

「大丈夫だ。」

……………高木君も、見舞いかね？」

「ええ……………」

「そうですね。」

高木刑事は内心ビクビクしながら答えた。

この警視のこんな態度、これまで見たことがない。

だがその心理は警視にはつきり伝わったらしい。

警視は少しだけ笑い、そして真顔に戻って、突然言った。

「なあ、高木君」

「何ですか？ 管理官」

「もしワシが、小さい子どもになつた経験話しても……
君はそれを信じるかね？」

「……えっ？」

『子どもになつたか？』

あー、それは……」

高木刑事はなかなか答えられない。

警視は苦笑した。

「信じられないだろう？」

「ええ、まあ」

正直言つて、警視の顔が、子どもになつたかのような顔だとは思えない。

警視の顔を見た途端、多分子どもがおびえてしまう。

当然、警視本人もそれを自覚しているはずだ。

しかし警視は言った。

「だが、昔ワシがまだ警部だった頃……、実際にそういう事件^{ヤマ}があつただよ」

「……ええっ？」

高木刑事は思わずそう言った。

一方、苦笑いの顔から苦々しい顔になった松本警視は、さらに語る。

「その事件が起こったのは今から13年前の冬。

まだ毛利君が刑事をしていた頃の話だ。

……きっかけになったのは、ある放火事件。

当時、火災犯係に配属されたばかりの毛利君や、強行犯係にいたワシも、その事件に関わった」

「……どんな事件だったんですか？」

火災犯係と強行犯係が同時に関わる事件なんて、そう発生しない。松本警視は、苦々しい顔のまま言った。

「いまだ、解決していない事件でな。

君が知っているかどうかは分かんが……。

10年以上が過ぎた今年の春になって、その事件に黒の組織が関わっていたことが判明してな……。」

「黒の組織が、ですか？」

松本警視は、頷いた。

かつて、とても強大な犯罪組織が存在した。

殺人すら躊躇しない、とても凶悪な犯罪組織だった。

……それこそ、9カ月前の壊滅が信じられないほどの。

その組織は、いつしか『黒の組織』と呼ばれるようになった。

その呼び名を使い始めたのは、高木刑事がよく知る探偵。

黒の組織は、少なくとも25年以上前には存在していたことが、

既に確認されている。

だが、その存在が広く知られるようになったのは、壊滅の直後だ。この組織が13年前の犯罪に関わっていても、何の不思議はない。きっと他の、多くの犯罪のように、壊滅後に組織が関わっていたことが判明したのだろう。

高木刑事の目の前、松本警視は強く顔をしかめた。

「当時のワシは、放火事件の唯一の生存者である女の子になつた。た。

……組織の存在がつかめたかも知れない機会を、失態で逃したのだよ」

「……管理官、どういうことですか？」

思いがけない話に、高木刑事は当然の問いを言う。だが警視はしばらく考えた後、高木刑事に告げた。

「高木君、……長い話を、聞いてくれるかね？」

「……ええ、もちろんです」

松本警視はその話を、語り始めた。

当時に戻ることは不可能だが、記憶を掘り返すことは出来る。語ることも、出来る。

失態の思い出は、つらい記憶だ。

だが全てを話そうと、松本警視は思う。

当時、警部だった彼がその女の子に出会ったのは、13年前の冬。
この緑台警察病院での出来事で、当時の女の子の年齢はわずか4
歳。

懐かしくもあり、苦々しくもある、雪の降る、4日間の思い出。

序話 13年後 過去の追憶（後書き）

あとがき

『新・朱色の君は冬空に歌う〜red&snow〜』、本日より連載を開始しました。

題名の変遷は、ブログに制作秘話（その3）として書かせて頂きました。

今日の朝8時に公開する設定にしています。

このシリーズの連載は、まず『名探偵コナンノベルズ』（小説家になろう）』で掲載し、

その翌日に、作者のブログ『新・沙汀の小説館』で挿絵付きで掲載する、

という形をとります（あくまで原則ですが）。

序話は、『新・沙汀の小説館』と『名探偵コナンノベルズ』で同時掲載しました。

第1話は『名探偵コナンノベルズ』では同時公開、『新・沙汀の小説館』では24日に公開する予定です。

今のところ、一週間で1話ずつ連載していくのが目標です。

対比してみるとお分かりでしょうが、微調整程度ですが変更点があります。

変更点は、第1話のあとがきに掲載します。

5月30日旧版削除に伴いサブタイトル修正

第1話 火事と出会い - 1

黒の組織壊滅の12年前 12月21日 深夜 都内某所

これほどの熱と炎を、これまで見たことも感じたこともない。赤い焔を持った風が、何もかもを翻していた。身体がちりちりと熱く、周囲は朱色に染まっている。

その子供は、燃える家の中で、呆然と立ち尽くしていた。

「オイ、逃げるぞ！」

自分ではない、他の者に向けられた男の声に、ハッとすると慌てて振り向くが、もう、声の主はいなくなっていた。

と、その時だ。

「……あーちゃん！ あーちゃん！」

自分を呼ぶ、母の声。

悲痛な悲鳴は聞こえても、母がどこにいるのかは分からない。自分の目の前、どさりと音を立て、黒い影が崩れ落ちた。

「ママ！」

不安に駆られ必死で叫んでも、誰も答えない。

怖かった。

一人ぼっちが、心細かった。
一人でいるのが、怖いと思った。

どうすればいいのか本当に分からない。

自分の身体は動かない。

どうしようもないのだと、幼心にも分かっている。

身に着けているのは子供用の赤いチャイナ服。

熱は、露出している部分を容赦なく攻撃する。

両腕の、激痛に近い火傷の痛みの中、その子は……

泣きながら、失神した。

消防隊が通報を受けて出動したのは、日付が変わるところだった。

だがその時すでに、その廃墟は燃え尽きていたという。

廃墟の周囲には他に家屋が無く、通報が遅れたのも仕方無かった
のかもしれない。

ただ、細く白い煙を出すだけの、燃え尽きた残骸の中。

消防隊は、生きた人間と、遺体になった人間の両方を発見した。

焼け跡の真ん中に、可愛らしい赤いチャイナ服を着た女の子が倒
れていた。

そのすぐそばには、腕の無い女性と、首から上のない女性、計2
つの死体。

それらの遺体の損傷は、かなり激しかったという。

消防隊員は、生きた子供の発見にかなり驚いた。

炎の温度は、数千。

火事の起こった家の中で、人が生きていられるはずが無い。

……以上の状況で、当然のごとく消防隊員達は考えた。

これは事件であり、詳しいことは分からないが、警察に連絡する必要がある、と。

きっと女の子は、燃え尽きた直後の廃墟に入り火傷を負い、気絶したのだろう、と。

そしてこの火事について警察に通報が行き、かつ、女の子は病院に搬送されることとなる。

搬送先の病院は、緑台警察病院だった。

新・朱色の君は冬空に歌う～red&snow～

第1話 火事と出会い - 1 (後書き)

5月25日本文微調整

第1話 火事と出会い - 2

黒の組織壊滅の12年前 12月22日 午後3時 緑台警察
病院

思わず空を見て、足を止める。
その日も、珍しいことに雪が降っていた。

警察病院の廊下を、ゆつくりと進む男性がいる。
それなりの大きさの花束を握った、背広姿の大柄な男性。
警視庁捜査1課所属、松本清長警部だ。

捜査一課という職場の関係上、彼がここを訪れた回数は数え切れない。
ない。

部下が怪我をする、殺人未遂の被害者の聴取……
例を挙げればキリが無いだろう。
彼にとっては半分、馴染みなじのような病院だ。

今回の見舞いも、よくあるケースの1つ。
自分の部下が強盗犯を捕まえる際に怪我を負い、入院したのだ。
そして今、彼は、その部下の見舞いに来ていた。
目的の病室のドアまで、もう5メートルほどしかない。

……と、その時だ。

「警部」

背後から、若い男の声の呼び声。
松本警部は振り返った。

背後にいたのは、夏に火災犯係に配属された、若い刑事。
自分が強行犯係である以上、しょっちゅう関わるわけではないが、
それでも名前は知っていた。

確か、名前は……

「毛利、君……だったか？」

その刑事……毛利小五郎は、小さく頷き、そして問うた。

「警部も、事情聴取でここに？」

「いや、部下の見舞いで……」

と、言いかけ、松本警部は逆に毛利刑事に問う。

「警部『も』？」

誰か……事情聴取する相手が、入院しているのかね？」

毛利刑事は神妙な顔で頷き、言った。

「昨日の夜、都内で、誰も住んでない廃墟が燃えて……、
通報を受けた消防隊が来た時、もう燃え尽きてたらしいんですけど
ね？」

焼け跡から、死体が2つと、4歳ぐらいの女の子が見つかって……」

「死体が2つと、4歳ぐらいの女の子？」

「ええ。」

その子、火傷を負って、ここに入院してるんですが……、
年齢が年齢だけに、あまり証言は期待してないんですけど……。

……まだ身元も分かってないし、廃墟の火事自体、放火の疑いが
あつて……」

「放火？」

毛利刑事は頷き、言った。

「その廃墟、電気もガスも止められているから……火の気が無いん
すよ」

……おいおい、と、言いかけた、その時だ。

毛利刑事の後ろから、さらに男の声がした。

「毛利、担当でない刑事に、あまり話すな」

毛利刑事が、少しだけ硬直した。

この刑事の背後に立っている大柄な男の名は、松本警部よりは年
下の、火災犯係の名物警部補。

「弓長警部補……」

松本警部の呟きに、弓長警部補は小さく会釈。

そして毛利刑事に言った。

「毛利、お前を待ってたんだ。」

女の子の事情聴取、年齢が4歳ぐらいなら、お前が適任だ」

……そりゃそうだ。

と、松本警部は思った。

人のことを言える身ではないが、この警部補の顔は、子供にとつて結構キツイ。

4歳ぐらいの女の子なら、顔を見て、怖がって泣いてしまう可能性はある。

話しかけるなら、女性か……そうでなければ、若い毛利刑事のほうがいいだろう。

新・朱色の君は冬空に歌う～red&snow～

第1話 火事と出会い - 2 (後書き)

5月25日本文微調整

第1話 火事と出会い - 3

黒の組織壊滅の12年前 12月22日 午後3時5分 緑台
警察病院

火災犯係の2人との会話を終え、松本警部は部下の病室に向かった。

なぜか半開きになったドア、あえてノックする必要はない。
ドアを全開にして病室に踏み入れ……

松本警部は目を丸くした。

個室のベッドの上、その部下は、大いびきで寝ている。

「……疲れた、のか？」

松本警部はつぶやき、苦笑する。

昨日、強盗犯確保の際、この部下は負傷した。

強盗犯は捕まり、傷も命に関わるものではない。

気が緩むのは自然なことだ。

自分の他に見舞い客はおらず、あえて起こす必要もない。

むしろ、しっかり眠ったほうがいい。……とも、思う。

警部は苦笑しながら病室を出……、

そして廊下で再び声をかけられた。

「……警部！」

若い男の声。

先ほど会話した、毛利刑事の声だ。

「……………」

緊迫した声に振り向いた松本警部に、毛利刑事が駆け寄る。

「警部、突然ですが、あの……………」

「どうかしたのかね？」

「警部、4歳ぐらいの女の子を見ませんでしたか？」

「……………」

いや、見ていないが？」

「実は、さっき話した放火事件の生き残りの女の子、ついさっきまで病室にいたらしいんですけど……………」

「……………いなくなったのかね？」

「ええ、いつの間にか病室から消えて、今、大騒ぎで……………」

松本警部は眉根を寄せた。

「……………分かった。

その女の子の搜索、ワシも手伝おう」

女の子が、あまり遠くにいないのは確かだった。

5分ほど前、看護師がその子を病室で確認しているという。

……そもそも、小児病棟でもないのに患者着の幼児が一人で歩いていたら、誰かが不審がる。

他の階に行くということも考えにくく、だから女の子の病室があるこの階を重点的に探すこととなる。

警部たちが探し回ること15分。

予想に反して、その女の子は、なかなか見つからない。

新・朱色の君は冬空に歌う～red&snow～

第1話 火事と出会い - 3 (後書き)

5月25日本文微調整

第1話 火事と出会い - 4

幼女が目覚めたのは、12月22日の朝8時ごろだった。

その時間、病室にいた医者と看護師が彼女の覚醒を確認している。

「……大丈夫？」

病室のベッドの上、目を明けた幼女に向かって、看護師はまず最初にそう言った。

黒の組織壊滅の12年前 12月22日 午前8時 緑台警察
病院

浮遊するようなまどろみの中、彼女は病室の白い天井を見た。
覚醒しきっていない思考、記憶はすぐにはよみがえらない。

周りを見渡すと、天井と同じく白い壁、そして自分が知らない白い服の人がいた。

すぐに白い服の人と目が合い、その人は自分のほうに近づいてくる。

「……一体ここはどこなのか。」

「これまでどんなことがあったのか。」

「……！」

突然だった。

燃える炎の光景と、母親の最期。

突然のフラッシュバックに気遣いの言葉は耳に入らず、

「あ……！」

かすれるような、叫び声ともいえぬ声を上げその幼女は身を起す。

反動でよろめき、慌てた支えの腕にしがみつき、

かすれ声で叫んだ。

あ、という声を伸ばした慟哭。

看護師の腕をつかんだまま、彼女はしばらく泣いたという。

以降、その子自身が覚えている記憶は断片的だ。

泣き疲れて寝てしまい、しばらく病室のベッドの上で半覚醒と睡眠を繰り返していたのだ。

結局その日は朝食は食べず、昼食は看護師の介助の上、完食。

火事現場で発見された女の子の名は、自称『あーちゃん』。
年齢は自称4歳。

両腕の火傷により入院していた彼女から、看護師は会話によって、
ようやくそれだけを聞き出したという。

新・朱色の君は冬空に歌う～red&snow～

第1話 火事と出会い - 4 (後書き)

5月25日本文微調整

第1話 火事と出会い - 5

廃墟の火事について、放火殺人の疑いが濃厚であるにも関わらず、捜査の手掛かりになりそうな大人の証人は、一人もいなかった。

火事を通報した者も、たまたま車で通りかかって火事を発見、通報しただけだと言う。

消防隊が通報を受けて出動した時、すでにその廃墟は燃え尽きていた。

もし放火殺人だとしても、おそらく犯人は通報される前に逃げている。

警察が、警察病院に入院中の女の子に注目したのは、ごく自然なことだった。

廃墟の焼け跡に倒れていたその子が、火事の唯一の生存者だったからだ。

……たとえ証言能力は無くても、捜査の手掛かりになりそうなことを言うかもしれない。

そういう期待と共に、警察は女の子への事情聴取の実施を検討し始める。

警視庁の者が、警察病院の医者に連絡を取ったのは、女の子の覚醒から約4時間が過ぎた昼ごろだった。

自分達が、その女の子と話をすることは出来るだろうか？ ……と。

医者は言った。

……火傷は命に関わるものではないし、意識もすでに回復している。

警察の人間との会話も支障は無い。

ただ、……非常におびえているようだ。

もし事情聴取をするなら、細心の注意を払ってほしい、と。

かくして。

火災犯係の弓長警部補と毛利刑事、そして別の係だが臨時に駆り出された若い女性刑事の3人が、警察病院を訪れた。

午後3時頃のことである。

黒の組織壊滅の12年前 12月22日 午後2時55分 緑
台警察病院

「……あーちゃんに会いたい人が、いるんだって」

看護師は、ベッドの上のあーちゃんにそう言った。

そのせりふに、あーちゃんは不思議そうに質問する。

「……ひと？ だれ？」

「んー、分かんないけどねー、多分優しそうな人だよ」

看護師は微笑んで言った。

実際に刑事たちに会ったわけではないが、まさかこの子相手に怖いおっさんが来ることはないだろうと思う。

「ふーん……」

「会ってくれる？」

看護師は微笑みながら、あーちゃんの表情を観察した。
彼女はしばらく考え込み、……顔を上げる。

「いいよー」

「んー、じゃあそれを伝えてくるね」

「行ってらっしゃーい」

可愛らしい言葉。

背を向けていた看護師は、思わず小さく吹き出した。

……もつとも。

その微笑ましい感情も、数分後には吹き飛んでしまうのだが。

看護師が去った病室のベッドの上、あーちゃんはゆっくりと立ち
上がった。

ベビーベッドの柵は外されていて、ベッドから下りるのは苦では
ない。

ゆっくりと床に足を乗せ、フト思った。

この部屋の外、いったい何があるんだろう、……と。

人に会う約束をしたことは、もはや頭から消えていた。
病室のドアを開けた先、あるのは壁にドアが並んだ廊下だ。

ペチペチと、裸足で廊下を進む。

進む先、半開きのドアがあった。

覗くと、ベッドの上でいびきをかきながら寝ている人がいる。

あーちゃんはその病室に入った。

そして、……あろうことがその病室のベッドの下にもぐりこみ、

そのまま寝てしまったのである。

第1話 火事と出会い - 5 (後書き)

5月24日誤字修正(弓長さんの階級が変わってない)

5月25日誤字修正(午後2時を午前2時と書いていた)

5月25日本文微調整

第1話 火事と出会い - 6

黒の組織壊滅の12年前 12月22日 午後3時27分

病室から消えた女の子を探し始めて、20分が経過した。
女の子は全く見つからず、看護師たちの焦りも増していく。

「……他の階に行ったんすかねえ？」

先ほど松本警部に話しかけた場所、刑事が入院中の病室の前で、
毛利刑事は弓長警部補に話しかけた。
警部補は黙ったまま、分からないと表情で返答。

二人の所に、廊下の向こうから松本警部もやって来る。

「見つかったのかね？」

「いや、まだで……」

す。と、毛利刑事は言わなかった。
かなり大きな声が、すぐそばの病室から聞こえたからだ。

それは大人の声ではない。

子供の、……しかもどう考えても泣き叫ぶ声だった。

「……？」

弓長警部補と松本警部の二人はその病室を見つめる。

松本警部は考えた。

この病室には、いびきをかいて寝ていた部下がいるのみ。

つまり、……病室に子供が入ってきてても、寝ている部下はまず気づかない。

「……成程」

呟きながら、松本警部は半開きの病室のドアを大きく開けた。

病室に踏み込み見えるのは、ベッドの上で目を覚ましつつある部下の姿。

子供の姿はどこにも見えないが、だが泣き声は確実に聞こえる。
……それも、ベッドの下から。

松本警部は無言でかがみ込んだ。

ベッドの下、思った通り、患者着姿で泣きじゃくる幼児がいる。

「……」

その幼児と、目が合った。

黒い髪に半ば隠された、だが泣いているのが一目で分かる、そんな顔をしていた。

目が合ってから後悔した。

自分のこの顔では、この子を怖がらせてしまうのではないかと。

だが、

「……………」

だが、懸念はすぐに消えた。

その子は不思議そうにこちらを見、小さな手を伸ばしてくる。

……………もしかしたら、自分に恐怖感を感じないのかも知れない。

「もっと、……………こっちにおいで、嬢ちゃん」

迷いつつも言うと、幼女は答えた。

「ん……………」

伸ばすように近づき、患者着の下、腕に巻いた包帯が見え、だがそれは気にせず、

「……………」

手が届いた。

「こっちにおいで」

幼女はうなずいた。

ベッドの下からはいずり出てくる。

膝まで外に出たところで、警部は彼女に大きな負傷は無いと目視で確認。

背後のドアから看護師が入って来る気配を感じつつ、松本警部は

質問した。

「嬢ちゃん、名前は何？」

「あーちゃん」

言いつつ、女の子は立ち上がった。
そして警部に問いかける。

「おじさん。あなたは、だれ？」

……それが、松本警部とあーちゃんの出会いだった。

第1話 火事と出会い - 6 (後書き)

あとがき

『名探偵コナンノベルズ』では同時掲載、『新・沙汀の小説館』では1日遅れの掲載となります。

あくまで旧版の微調整なので、ストーリーに大きな変更はありません。

細かい点での設定変更は以下の2つです。

- ・警察病院名の明示(警察病院 緑台警察病院)
- ・弓長さんの階級(警部 警部補)

実は、原作中での弓長さんの階級は警視だ、と思い込んでいました。書き直すときに資料を見て勘違いに気づき、驚いて直したわけです。

また、旧版では、一人称の違いで背景を色分けしていましたが(P版に限る)。
それも今回からは色を統一しています。

5月24日誤字修正(弓長さんの階級が変わってない)
5月25日本文微調整

幕間1 13年後 過去の語り - 1

黒の組織壊滅から9カ月後 緑台警察病院

珍しく雪の舞う、東京の冬の朝。

緑台警察病院の廊下で会話している、2人の人間がいる。
警視庁捜査一課の、高木刑事と松本警視だ。

「当時は、弓長警部も警部補だったんですね」

「ああ、警部補だったよ」

事件から、もう10年以上の時間が過ぎた。

時が流れていくうちに、松本警部は警視に、弓長警部補は警部になっ
たし、

毛利刑事は……別件で警察を辞め、探偵になっている。

「女の子は、連れ戻されたんですか？」

警部は苦笑いを浮かべた。

「連れ戻されたさ。

かなりの医者や看護師がやって来て、女の子を病室に連れ戻した。

当然だが、……その時は、もうこの子に関わることはないんだと

思っていた」

「でも、警視はまたその子に関わったんですね？」

「関わった。」

「強行犯係のワシが関わる名目が出来たからな」

「名目、ですか？」

「……女の子が火傷した火事の現場から、2人の死体が見つかったと言ったろう？」

「ええ」

警視の顔から笑いが消えた。

そのまま苦々しい顔で、彼は言う。

「見つかったのは、首の無い女性の死体と、腕の無い女性の死体。……首の無いほうの指紋が奇跡的に採取でき、それが当時手配中だった、連続強盗殺人犯の指紋と一致した」

「……ええっ？」

「一方、入院していた女の子は、泣くわ暴れるわ毛利君を蹴るわ……」

とにかく大荒れだったらしい。

「だが泣きながら『おじさんに会わせる』と言ったそうで、その子が『おじさん』と呼んでいた人間、……つまりワシが事情聴取に駆り出された」

松本警視は目を閉じた。

語りながら思い出すのは、かつて犯した失態の記憶。

そう、自分が再び緑台警察病院に行ったのは、……あーちゃんに、初めて会った日の翌日だった。

幕間1 13年後 過去の語り - 1 (後書き)

あとがき

幕間1と2は同時掲載です。

DCNでは30日、作者ブログでは31日の公開になります。
今回のブログ更新では、挿絵はありません。

5月30日サブタイトル修正

幕間2 13年前 ある者の語り - 1

黒の組織壊滅の12年前 12月21日 深夜 都内某所

燃え盛る廃墟から離れた場所。

文字通り対岸の火事とも言える安全な距離に、一台の車が止まっている。

運転席に乗ってるのは、左の^{まぶた}瞼に小さな傷のある男。

大柄ではないものの、刑事と言っても通用しそうな顔だ。

彼は火の付いていないタバコをくわえ、ある文章を読み上げている。

「……六鷹茅乃^{むつたかかやの}、1月28日生まれ、現在29歳。

旧姓は長谷川。

愛知県名古屋市中生まれ育ち、高校の看護科を卒業後、愛知県警に採用される」

それは、一人の女性の悲しい経歴。

「警察学校を出た直後の4月、同期の六鷹良秋^{むつたかよしあき}と結婚。

良秋とは高校時代からの仲だった。

しかし結婚退職はせず、20歳の誕生日の翌日、1月29日に長男^{かなで}の奏を出産。

これは予定日より大幅に早い早産であり、この出来事を機に彼女は警察を退職する」

車には男以外に誰もいないのに、紙を読み上げるのは甲うため。廃墟の中で、彼女は死んでいるのだから。

「最初の出産こそ早産だったものの、2人目、3人目の出産は順調だった。」

しかし3人目の子供が生まれて一週間後、六鷹夫婦と子ども3人は突然姿を消した」

そして、

「夫の良秋の血痕が自宅に大量に残されており、愛知県警は事件性が高いと判断、捜査を開始。」

当時、良秋は刑事になって一年目、とある大規模窃盗団の捜査に当たっていた。

……失踪の半年後、その窃盗団は検挙されたものの、窃盗団が六鷹一家の失踪に関わった証拠は無かった」

読み上げるべき内容は、更にある。

「また失踪時の自宅には、3人目の子供の、不完全な出生届も残されていた。」

親族はそのまま出生届を出さざるを得ず、……結果的にその子の戸籍は不完全なまま。

どうしようもなく、現在に至る、か……」

読み上げ、彼は小さく息を吐く。

紙を置き、頭を掻き、だがタバコに火は付けず、彼は咳いた。

遠くとも視界の真中で炎は強く燃え上がり、彼女と彼女の未っ子のことを思いつつ、

「良秋君、茅乃さん……、あと、あーちゃんも」

新・朱色の君は冬空に歌う～red&snow～

誰も聞かぬ眩き。

「君達は、僕をどう見ているのかな……」

幕間2 13年前 ある者の語り - 1 (後書き)

あとがき

初出情報のオンパレード。

もしかしたら読み流した方がいいかもです。

ブログ限定ですが、時系列のまとめを作ってみました(5月31日公開予定)。

情報整理に繋がればいいんですけども。

5月30日セリフ誤字修正

(血痕「が」残されており、です。血痕「と」では意味が通じません)

6月6日本文修正

(男の、目の傷に関する設定ミスです)

第2話 似ているおじさん - 1

未だに後悔することがある。

あの時、もう少しマトモなことは出来なかったのか、と。
今になってそう考えるのは、かえって卑怯だとも思うのだけど。

黒の組織壊滅の12年前 12月23日 午後1時 緑台警察
病院

「すみません、警部。」

こんなことでご協力をお願いするとは……」

「いや、……大丈夫なのか毛利君」

警察病院の、あーちゃんの病室前。

松本警部を待っていたのは、火災犯係の2人と、他の係から駆り出されたらしい女性刑事、計3人だった。

火災犯係2人のうちの部下のほう、毛利刑事の髪は滅茶苦茶になっ
つていて、

……あーちゃんに接した結果がどうだったのか、一目で分かる。

「本当に火傷で入院してる幼児なのかと思うくらい、遅たくましいんです
よ、あの子。」

泣くわ蹴るわしがみ付いたら離れないわ、

……こっちは手荒な事は出来ないのに」

「そうか……」

大人の犯人を取り押さえるのとは、わけが違う。

相手はどう見ても義務教育前で、かつ入院中の子供。

医者に言われなくとも、細心の注意を払うのは当たり前のことだ。

「『おじさんに会わせる』って、それだけしか言わないんすよ。

児童相談所の職員だって、それで今日は諦めて、さっき帰りましたから」

それなら、確かにその『おじさん』を呼ぶのが手っ取り早いだろう、が。

「……成程、でもなぜこの顔で呼ばれる？」

どう見たって子供が懐かない顔だぞ」

きつと誰もが感じる疑問を、松本警部は呟いた。

皆の会話は、各々の思考により一旦中断する。

「……もういい、毛利。

髪直してこい」

と、火災犯係の上司のほう、弓長警部補が言った。

毛利刑事が頭を押さえてトイレに走って行くのを、視界の端に見
つつ。

警部補と警部は、背後のドアに意識を向ける。

ドアの向こう、あーちゃんの病室では、あーちゃんと看護師が一緒にいる状態。

相手がもう少し大人しいのなら、割と良い条件の事情聴取とも言えるだろう。

……だが、実際は違う。

警部補の目の前で、松本警部はドアを開けた。

迷っていても仕方がない。

こんな風と呼ばれたなら、行くしかないだろう。

第2話 似ているおじさん - 1 (後書き)

あとがき

こんばんは、汀です。

第2話一気に掲載のはずが、作者スランプのためこの部分だけの掲載となりました。

本当に、申し訳ありません。

プロットは執筆前から出来上がっているのですが、それ以上筆が進まないという不思議な状況が続きました。

次回更新時には、もう少しマトモな状態になっていればと思います。

DCN掲載版に限った話ですが、先日この小説にウェブ拍手を設置しました。

今は、拍手した先のページには何も設置していません。将来的には何か載せようかなと思っています。

DCNでは挿絵無しで連載していますので、載せるとしたら挿絵以外の物になると思います。

第2話 似ているおじさん - 2

黒の組織壊滅の12年前 12月23日 午後1時5分 緑台
警察病院

昨日、部下の病室で出会った時に分かったこと。

……『松本警部の顔を見ても、あーちゃんは怖がらない』。
それにしても、『怖くないひと』と『会いたいと思うひと』には、
結構な差があるだろう。

この状況で呼ばれたら、病室に行くしかないのは分かっている。

分かった上で、松本警部の心の中には疑問が浮かぶ。

なぜ、自分が『あーちゃんが会いたいと思うひと』になったのか。
あるいは、……本当に自分が『あーちゃんが会いたいと思うひと』
なのか。

念のため記しておく。

2つ目の疑問は、松本警部が病室に入るなり解消した。

あーちゃんが、警部に抱きついてきたのだ。

「……おじさん！」「ちよっと、あーちゃん！」

看護師の制止も聞かず、駆け寄ってくる幼女。

とっさに身を屈めて抱きとめると、あーちゃんのほうが抱き返し

てきた。

「……あー、ちゃん？」

とりあえず名を呼び、頭を撫で、身体を離す。

あーちゃんは、嬉しそうな顔で警部を見上げた。

部屋の中、あーちゃん以外の人間、

……つまり大人達は、嬉しさでなく、驚きと戸惑いを感じているのだが。

「刑事さん、……好^すかれていますね」

意外そうな声で看護師が言う。

「ええ、そのようで」

戸惑いながらも警部は答えた。

若くない強面の私服刑事に、なぜかなつく女の子。

自分たち同様、看護師も、この2人を不思議な組み合わせだと思っ
っているに違いない。

「私、病室の外に出ておきますので。」

……何かあつたら駆けつけますから」

「分かりました」

看護師と女性刑事の会話を聞きつつ、松本警部は思案する。

……さて、どうしたものか。

スーツの裾を引っ張ってくるあーちゃんの手を、優しく握りかえす。

松本警部は、再び屈んで頭を撫でた。

警部にも一応、娘はいる。

いるが、あーちゃんほど幼くはない。

毛利刑事の娘の年齢と、あーちゃんの年齢は近いらしいとは聞いているが、

……だからと言って、毛利刑事とこの子との相性が良いのかは、果てしなく謎だ。

色々考えていると、女性の刑事が、そつと警部の横に近付いてきた。

警部のように屈み、優しくあーちゃんに尋ねる。

「このおじさん、誰かに似てるの？」

あーちゃんは少し考え、答えた。

「うん、……おじさん、似てる」

警部は、あーちゃんから手を離れた。

女性刑事は、態度を変えずに再び問う。

「誰に似てる？」

新・朱色の君は冬空に歌う～red&snow～

「
……」

返ってきた答えは、首をかしげた上での沈黙だった。

第2話 似ているおじさん・2（後書き）

あとがき

いつもと比べて掲載が遅れたことをお詫びします。

13日中か14日になるかは分かりませんが、もう1回か2回、小説を更新する予定です。

掲載日が本来の小説掲載日とは違ったため、気づいてないかたもおられると思いますのでお知らせです。

先日、幕間2の挿絵をブログに掲載しました。

興味のあるかたはどうぞ。

あとがき下のバナーから行けます。

6月13日あとがき誤字修正（お詫びがぼわびになっていた（汗））

第2話 似ているおじさん - 3

黒の組織壊滅の12年前 12月23日 午後1時10分 緑
台警察病院

この時、毛利はみじめな気分になっていた。

詳しく言えば、あの子、……あーちゃんのおかげで散々な目にあり、みじめな気分になっていた。

怒りや悔しさから来る、感情だった。

もちろん、そういったことを表に出しはしない。

相手は子どもであり、対する毛利は大人で、しかも刑事だ。

毛利のほうが自制すべきということぐらい、もちろん分かっていた。

……分かっていた、のだが。

病室の扉が開いたので、松本警部は振り向いた。

「……毛利君」

警部が名を呼ぶと、会釈が返ってくる。

少しばかり身繕いしたらしい毛利刑事は、あーちゃんを見て

……どう見ても、愉快そうには見えない顔をする。

あーちゃんの相手を女性刑事に任せ、警部は立ち上がった。

毛利刑事に向かい合い、あーちゃんに聞こえぬようにして、

「毛利君は、この子に向いておるのかな」

「……どうでしょうか」

毛利刑事相手に、あーちゃんは暴れた。

確かに松本警部に比べれば、毛利の顔は怖くない、……が。
あーちゃんと相性は良いのかは疑問がある。

逆に、毛利刑事が問うた。

「事情聴取は上手く……」

問いを言いきる前に、答えた。

「いってない。」

ほとんど沈黙だな」

「……そうですか」

その時突然、会話に声が割り込んできた。

「そのひと、だれ？」

振り返るまでもない、あーちゃんの声だ。

女性刑事から毛利刑事に関心を移したのか、警部のほうに寄って
来る。

毛利刑事は屈みこんだ。

この子相手に怒りを爆発させることは出来ない、理性がそれを許さない。

だからせめて、『暴れちゃだめだ』と、優しく言い含めるつもりだった。

「あーちゃん、人を相手に暴れるとすごい痛いんだよ」

しゃべり方に違和感があるのは分かっていた。

理性が感情を押さえているのも、自覚していた。

「だから暴れると困……」

会話の途中で、アッパーをくらった。

見事にアゴを直撃する、推定4歳の拳。

理性が飛ぶ。

怒りがある、悔しさがある、それらが全て噴き出し、周りが見えない一瞬、

「コラッ！」

毛利は、思わず怒ったのだ。

毛利が怒鳴った結果、弓長警部補と看護師がすっ飛んできた、あーちゃんは半泣きになった。

……本格的に泣かなかったことに、警部は密かに感心したのだが、

それは置いておいて。

「帰られないんですか、刑事さん」

怒鳴った後の、一番重要な結果。

看護師の視線が冷たくなり、事情聴取を続行することが気まづくなつた。

「……すいません、帰ります。

ごめんね、あーちゃん」

女性刑事は謝り、毛利刑事はしよげかえり。

退出しながら、松本警部は看護師の様子をうかがう。

きっと看護師の様子からすると、この白衣の天使はあーちゃんを見守るのだろうな、と。

……当たり前で、しかも警察にとって気まづい事だが、それがこ
の子にとって必要な行動なのだろう、と考えつつ。

第2話 似ているおじさん・3（後書き）

あとがき

とりあえず今回の更新はこれで終わりです。
ブログの掲載作業にもすぐに取りかかります。

……今回、すごく書きづらかったです。
特に毛利がキレルシーンが書きづらかった。
まだまだ私は未熟です。

第2話 似ているおじさん - 4

黒の組織壊滅の12年前 12月23日 午後1時17分 緑
台警察病院

「何やってんだ、毛利……」

事情を知ってあきれた弓長警部補の、冷やかな視線が毛利に刺さる。

いくら蹴られても、アッパーをくらっても、入院中の幼児に怒鳴るべきではない。

ましてや、この事情聴取は、これまでほとんど進んでいなかったのだ。

聴取を中断させた毛利刑事の責任は、それなりに重い。

女性の刑事と松本警部を足して、合計4人で廊下を歩く。

あーちゃんの病室から退室したあと、彼らは、駐車場へと向かっていた。

失敗した部下に説教するのは、上司の仕事だ。

落ち込んでいる部下を励ますのも、上司の仕事だ。

忘れてならないのは、ここが病院であるという事実。

きつく注意をする場所ではなく、告げる言葉は説教というよりも小言という形になる。

落ち込んでいる毛利刑事と、あきれている弓長警部補の、すぐ後ろを松本警部は行く。

眼前の火災犯係2人の会話に、強行犯係の警部が口を出す気はない。

「医者に聞いたんだが、あのガキは近いうちに退院するらしい。記憶が薄れる前に事情聴取したかったんだが、貴重な機会が潰れたぞ」

だが、聞こえてきたのは初耳の情報だ。

「……えっ？」

退院の見通しは立ったのかね」

松本警部は2人にそう問うた。

弓長警部補は立ち止まった。

歩いて行き着いたこの場所、エレベーターの前で振り返り、警部に答える。

「ええ、先ほど医者が話してました。

元々が、大したことない両腕の火傷で、

……近いうちに退院できるそうです」

……松本警部や毛利刑事がアーちゃんの病室にいた時、弓長警部補は病室のすぐ外で待機していた。

その時医者に聞いたのか、と、一応、警部は納得する。

「だったら、あの子は児童相談所に保護されるんでしょうね」

と、これは女性の刑事の発言だ。

「だろうな。」

児童相談所が放っておくとは思えんよ」

警部がそう言ったその時、エレベーターが到着した。

周囲に聞き耳を立てる人間がいなければ、エレベーターの中でも会話は続く。

弓長警部補は、更に告げた。

「医者が言うには、あのガキの身体には、気になる点があるそうです。身元特定につながるかもしれない特徴で、これから検査する予定らしいです。」

検査結果が分かり次第、警視庁に連絡すると言っていました」

「……ホオ」

果たして、それはどんな特徴なのだろう？

会話は他人に邪魔されることなく、エレベーターのドアは1階で開いた。

刑事達は受付を突っ切り、病院の外に出る。

今回、車を止めているスペースは、病院の正面入り口から約30メートルの場所。

今は冬。

外を歩くと、身を切るような寒さを感じる時期だ。

凄まじい北風を聞き、誰からともなく足を止め、……そして空を見上げる。

「この天気、いつまで続くんでしょうね」

「昨日からしばらくの間は、降ったり止んだりが続くらしいぞ」

火災犯係の会話を、強行犯係の警部は確かに聞いた。

……風と共に、雪が舞い始めていた。

第2話 似ているおじさん - 4 (後書き)

あとがき

2週連続で投稿が遅れたことをお詫びします。

明日投稿予定の第2話5で、第2話は終わります。

弓長警部が出る巻が手元になかったので、今回、敬語表記にかなり苦労しました。

原作と突き合わせてみて不自然だった場合、こちらを変えるかもしれない。

6月20日投稿直後に誤植発見、修正しました。

第2話 似ているおじさん - 5

黒の組織壊滅の12年前 12月23日 午後6時 警視庁

「警部、あの子の検査の件ですが」

デスクで書類を書いていたら、弓長警部補がやって来た。訪問を予測していた松本警部は顔を上げ、答える。

「病院から連絡が来たのか」

「ええ、さきほど来ました」

「検査の結果は？」

おそらくは病院から得た情報が書いてあるのか、メモを片手に警部補は言う。

「……どうやら、あのガキは半陰陽らしい、とのことだ」

「半陰陽？」

怪訝そうな顔をした警部に、弓長警部補は答えた。

「どうも、男か女か性別が判定しづらい身体だそうです。女かと思っていたら、案外そうでもなかったようですね」

警部補は、自身の首筋を掻いた。

「焼け跡でチャイナ服着て倒れてたから、誰だって女の子だと思っ
たんでしょうが」

「確かに」

髪型は極端に短いわけでも、長いわけでもない。

顔だつて、どちらの性別にも取れる、文字通りの童顔だ。

警部は思わずつぶやく。

「『あーちゃん』というあだ名しか分かってない現状では、

……どういう扱いで育てていたのかも分からない、か」

これまでずっと女の子だと思っていたが、検査の結果が分かった
今、その思い込みは揺らぐ。

ひよつとしたら、男の子として育てていた子、……なのかもしれ
ない。

「結果判定に日数がかかるので精密検査はしてないそうですが、医
者が言うには、

『部分型アンドロゲン不応症による男性仮性半陰陽』……とかい
う症状じゃないか、と。

……とにかく性別に異常があるのは分かったんで、今、行方不明
者の情報を調べさせてます」

もしも搜索願が出されているのなら、あーちゃんの身元はきつと
分かる。

あの年齢で、かつ、性別判定がしづらい身体。
2つの特徴があるだけで、身元はかなり絞られるだろう。

ふと、弓長警部補はメモから視線を上げる。

「毛利に聞きました。」

『おじさん、似てる』って、病室であの子が言ったそうですね。
警部に心当たりは？」

「残念ながら、全く無い。」

誰かに似てるから、なつかれているのか……？」

現状ではそう推理するしかないが、そうすると、警部が誰に似ているのか、が、疑問として残る。

何故、あの子が『似ている』おじさんだと言ったのか。
警部はそれを知りたいと思った。

明日も、病院での事情聴取がある。

第2話 似ているおじさん・5（後書き）

あとがき

これで第2話は終わりです。

物語は、これで約半分を終えたことになります。

第3話、第4話と、プラスアルファでいくつかの話が入ります。

なお、今回の話に出てくるあーちゃんの症例は、一応実在する病名を出しています。

が、検査の日数など資料が見当たらず、そのあたりは結構あやふやです。

6月21日 日本文誤字修正

幕間3 13年後 過去の語り-2

黒の組織壊滅から9ヶ月後 緑台警察病院

「……毛利さん、大変だったんですね」

若き毛利刑事の姿をいちいち想像したのか、高木刑事は同情と苦笑が混ざった声でそう言った。

「子供相手に本気になっていたからな、怒鳴った時の毛利は」

あの時の毛利にとって、あーちゃんは可哀想なガキでもなく、傷ついた被害者でもなかった。

少なくとも、怒鳴ったあの瞬間、あーちゃんが生意気なガキにしか見えなかったのだろう。

「ところで、その、……あーちゃんの身元は分かったんですか？」

「予想通り分かったよ。」

「身元は、……一応判明はしたんだよ」

警視が詳細を話そうとしたその時。

突然、横から女性の声が割って入ってくる。

「あら、……管理官もお見舞いですか？」

松本警視と高木刑事は振り向いた。

声の主は、警視の部下、かつ高木の先輩である人間。

もうすぐ結婚予定なのに、（本人は無自覚だが）警視庁の男性達にアイドル視されている、

……ある意味とてつもない女性の刑事だ。

「美和子さんも、見舞いに？」

「ええ」

高木の問いに、彼女、……佐藤美和子刑事はあっさりと頷いた。

そして佐藤刑事は逆に二人に問い返す。

「こんな所で、お二人とも何を話し込んでらっしゃったんですか？」

「……えっと」

どう言うべきか迷い、高木刑事は返答に詰まる。

だから警視が答えた。

自分の失敗談だと最初に話していた以上、高木が説明に困るのも当然だと思いながら。

「ワシの昔話だよ。」

……君は、聞いたことがあったかね？

ワシが、子供に何故かなつかれた事件ヤマなんだがね」

「あ、……はい。」

確か、この病院でのお話でしたよね」

彼女は自らの記憶を辿り、一瞬迷った上で肯定。そして更に、辺りを見て納得したような顔をした。

以前聞いた話であるにも関わらず、佐藤刑事も、思い出話の聞き手になる気らしい。

思い出話をすることは、警視が自分から望んだことだ。

真面目な部下である限りは、聞くことを拒否するようなものでもなく、警視は話を再開する。

……あの時、あーちゃんの身元が分かった後も、彼は事情聴取のために警察病院を訪れたのだ。

幕間4 13年前 ある者の語り - 2

黒の組織壊滅の12年前 12月22日 夜 都内某所

一見、何の変哲もない建物でありながら、周辺の道路をよく観察できる場所に、その新築マンションは建っていた。

そんなマンションの廊下を、スーツ姿の男が一人で歩いている。大柄ではないものの、刑事と言っても通用しそうな顔の男だ。彼の顔、左の^{まぶた}瞼には小さな傷がある。

廊下を歩いていたその男は、目指す部屋の前で立ち止まった。ドアをノックし、彼はやや大きな声で言う。

「夜分遅くにすいません、今日の昼に連絡した者ですが」

……言葉を発した結果として、1分もしないうちに部屋のドアは開いた。

左の瞼に小さな傷のある彼は、部屋の人間に会釈し、部屋に上がり込み、
刹那、

「うわっ！」

……部屋の人間に襟首をつかまれ、部屋の奥に引き込まれる。

彼は、真正面から睨みつけてくる男の顔を見た。

……この部屋の住人で、冷たい眼と長い銀髪が特徴の男。

ちなみに体格は、襟首をつかんでいる男のほうが結構デカイ。

「突然他人経由で連絡しやがって、……何の用だ？」

まあ殺し屋が冷たい眼をしても不思議はないんだよな、……と。

襟首をつかまれている彼は、この状況でもそんなことを考える。

もちろん、口に出しはしない。

今言うべきなのは、別の言葉だ。

「入院中のガキを1人、病院から連れ去って欲しいんです。

あなたに任務を降り出すんじゃないかと、……僕も手伝いますから」

銀髪の男は、襟首を握る手を離さない。

左の脛に小さな傷のある彼は、今にも殴られそうな状態で、更に言葉を紡いだ。

「ガキの名前は、六鷹綾乃っていいいます。

4歳児で、今は緑台警察病院に入院中です。

両腕を火傷しているんですよ。

……火事の現場で倒れてるのが発見されたそうぞうで」

「なぜ、そのガキを病院から連れ去る必要がある？」

「ガキの親は、両方とも愛知県警の人間です。

そのガキが生まれてすぐ、ほかの、……他のガキも一緒に、一家丸ごと失踪した事になってますけど。」

つまり家族ごと消えたんで、そのガキ、0歳の頃から搜索願が出
されているんです」

襟首の手が、一瞬離れる。

だかもっと苦しい事態になった。

目の前の手が……服の襟首ではなく、彼自身の首をつかんでくる。

「身元が、特定される恐れが強いです。

あのガキ、身体が特徴的だから……」

「どづいつことだ？」

手の締まりが増した。

息が一気に苦しくなる。

「う……。 」

組織ほくたちが、県警の人間の一家を、丸ごと、組織の中に引き込んだこ

とが、……ばれるかも知れない。

身元がバレて、『キミの、父さん母さんは、どこなの？』、とか、

『どんな所で、暮らしてたの？』って聞かれれば、

……何らかの組織が、関わってるのが、分かるかも」

「違う。

ガキの、身体の特徴を聞いている」

「半陰陽、なんですよ。

生まれつき、性別が、分かりにくい身体で。

一応、女の名前で、組織の中で、育ててますけど。

それに、あのガキ、戸籍も不完全だし」

「……」

わずかに、手が緩む。

「戸籍はあるにはあるけれど、性別と名前が、空欄なんです。

一家が丸ごと失踪したとき、出生届は家に残されていたけど、性別と名前が空欄で、

……親族は、仕方なくそのまま届を出した、って……」

言い終えた直後、手が離れた。

男は座り込み、ゴホゴホとせき込む。

恨みがましい目で、彼は銀髪の男を見上げた。

「いくら何でも苦しいですよ、ジンさん」

この新築マンションは、犯罪組織に属する構成員の住居、兼、組織のアジト。

そして、この部屋に住む銀髪の男の名は、ジン（もちろんこれは、組織で生きていくための偽名だ）。

ジンは、左の頬に傷のある男にとって、敬意を払うべき組織の上役だった。

幕間4 13年前 ある者の語り - 2 (後書き)

あとがき

若干、他の話より長めになりました。

今回の更新は、幕間2つです。

次回から第3話に入ります。

ブログをご覧の方はご存じでしょうが、作者のサイトを立ち上げることにしました。

現在サイト構築中で、7月1日の開設が目標です。

6月28日本文修正

(男の傷は、左目の目元ではなく瞼です。前回の幕間でも同じ訂正をしています。)

何で同じミスやらかしてるんだらう…… (汗)

第3話 幼女は待ち人を歌う - 1

本気で人を待つというのは、苦しみそのものでしかない。
だからこそ人は忘れるし、忘れるために新しく何かをしようとす
る。

ずっと捜査に携わるといいうのは、そういう意味でかなり重たいこ
となんだろう。

忘れないことは、仕事の一部であり義務になるのだから。

黒の組織壊滅の12年前 12月24日 午前9時15分
警視庁

クリスマスイブでも、非番でない限り仕事はある。

出勤後早くから、弓長警部補と毛利刑事は強行犯係を訪れていた。

あーちゃんに関する情報を、松本警部と共有しなければならぬ。

警部のデスク前で3人が揃い、毛利刑事は書類片手に報告する。

あーちゃんの身元の情報、その重要な手掛かりを伝えるために。

「調べてみたら、案の定それらしい子供が引っ掛かりました。

『性別が判定しづらい推定4歳児』という情報に該当するのは、
現時点では一人だけでした」

「どこの子なんだ？」

警部の問いに対し、毛利は少し言い淀んだ。

弓長警部補が続きを読むよう目配せし、説明が続く。

「……それが、一家丸ごと失踪した家庭の、3番目の子供のようにです。」

愛知県警の刑事の一家で、4年前の10月に突然消えたそうす。

「事件性はあったのかね？」

刑事一家の失踪。

場合によつては重大な事件に繋がり得るケースだ。

毛利は真剣な顔で頷き、告げた。

「ええ。愛知県警によると……、家に大量の血痕が残っており、捜索は行われていたようです。」

ですが、手掛かりすらつかめずに捜索は中止になった、と」

「……！ そんな家庭の子だったのか。」

あーちゃんの性別は？」

「その、刑事の一家が失踪したのは、あのガキが生まれた1週間後だったそうです。」

家に不完全な出生届が残されて、親族はやむなくそのまま届け出を出して、

……戸籍の性別と名前は、未だ空白のままだとのこと。」

「そうか……」

「名前が空欄だけで、名字は記載されてることです。」

『六鷹』^{むつたが}って名字で、……性別、名前不明のまま搜索願が出されてました」

「……あの子は半陰陽だ。

はつきりしている性別なら、男か女か書くことが出来たんだろう」
身体が男か女が分からず、戸籍の性別欄も空白のままなら、捜索願もそうした形で出さざるを得ない。

そして、捜索願に男とも女とも書いてなかったために、身元特定に繋がった。

書類から目を離し、毛利刑事は疑問を呟く。

「どちらの性別なんでしょうかね、あのガキ。

焼け跡では赤いチャイナ服を着て倒れてましたけど」

その呟きに、上司は反応した。

疑問の答えではない言葉が、呟きに重なる。

「……だが、失踪の経緯から考えると、性別以上に重要なことがある」

「えっ？」

「分らないのか毛利。……これまでのことを考えてみる」

弓長警部補は少々あきれ顔だ。

言いたいことを悟った松本警部が、フォローするように説明する。

「話からすると、失踪した愛知の六鷹家は、親と子ども3人の一家

だっただんたろう?」

言われ、毛利は再び書類に目を向けた。

「ええ、……5人家族です。

刑事の父親と、元婦人警官の母親だったそう。

そして、失踪当時5歳の長男と、3歳の長女、それから……」

「性別・名前が空白の、生まれつき性別が分かりづらい第3子、というわけか」

毛利は頷いた。

では、と警部は続ける。

「4年前、六鷹家の5人は、事件性を強く疑われるような方法で失踪した。

親が子どもの出生届を、中途半端に残さざるを得ないような消え方だ。

……ここまでは分かるだろう?」

2度目の頷きには返事も伴った。

「はい」

「失踪から4年後の今。

一家のうち、4歳児に成長した第3子が、何故か火災現場で発見された。

火災では変死体も2つ発見されていて、そのうち1つは強盗殺人犯の死体、火災は放火殺人の疑いがかけられた。

だが捜査を行っていても、有力な手掛かりは今のところ見つかつ

ていない」

一方、

「火災現場で倒れていた第3子は、火傷で入院した。原因は分からんが、病院でワシになつてきている……」

事実をまとめた上で考えると、浮かび上がってくる謎がいくつもある。

放火犯の正体や、4年前の失踪の原因は、当然警察が明かすべきことだ。

だが、それらを踏まえた上で、一番重要な謎は何か。

「では、失踪から今までの4年間。

第3子のあーちゃんを含めた六鷹一家は、どこでどうやって暮らしていたんだ？」

第3話 幼女は待ち人を歌う - 1 (後書き)

あとがき

既出情報のオンパレードですいません。

今日か明日中の、第3話 - 3までの掲載を目指します。

投稿後追記

すいません、本格的に体調を壊しました。

予定通り書けるか結構怪しいです。

7月20日追記

アドバイスに従ってこの話を削除し、別のものに差し替えました。

あらすじは変わりませんが、一部話が変わっています。

第3話 幼女は待ち人を歌う - 2

黒の組織壊滅の12年前 12月24日 午前11時 緑台
警察病院

火災犯係の2人は、他に仕事があるらしい。

だからこの日、女性の刑事と松本警部の2人のみが警察病院を訪れることとなった。

病院に着いた後、病室へと向かいながら警部は思考する。

あーちゃんと事情聴取と、毛利について考えながら、警部は歩く。

あーちゃんの身元が分かる前も、分かった後も、事情聴取で聴き出したいことは多くある。

ただし相手は幼児だ。

それも、よく暴れまわる、話がどこまで通じるか分からない幼児。

幼児相手にキレた毛利には少々同情しているが、警部はその同情を表に出すことはない。

少なくとも、言葉に出したりはしていない。

刑事である以上、苦勞を感じていても、こども相手の激昂は避けるべきだ。

……そんな思考を、女性刑事の静かな言葉が遮った。

「警部、児童相談所のかたです」

警部は顔を上げる。

警部の前方、あーちゃんの病室前に、2人の人間が立っていた。共に中肉中背で地味な格好の、女性と眼鏡の男性だ。

「警部がお会いするのは初めてでしたよね。」

きのうは、児童相談所のかたと入れ違いでしたから」

そういえば毛利がそんなことを言っていたな、と、警部は思い出す。

きのう警部が病院を訪れたとき、たしか毛利は……、

『児童相談所の職員は病室に来たが、事情聴取を諦め、帰った』
と言っていたのではなかったか。

だとしたら。

この職員2人は、毛利ほどではないが、昨日のあーちゃんに苦勞を感じた人間なのだろうか？

「ああ、入れ違っただろう。」

「どうも、……警視庁の松本です」

児童相談所の職員に言うも、反応がない。

いぶかしんで相手の様子を見ると、……職員2人は硬直している。

数瞬が経ち。

「あ、ハイ、すみません、どうも……」

我に帰ったらしく、あたふたとした様子そのままの、2人そろっ

た会釈が来た。

女性刑事が訝しみ、当然の質問を投げる。

「あの、どうかされました？」

「あ、いえ。何でもないんです、失礼しました。」

……刑事さんは、あの子の事情聴取に来られたんですか？」

……なるほど。

警部は、硬直の原因を理解した。

職員は、子供の事情聴取にはあまりに不向きな、警部の人相に驚いたのだ。

「そうですよ。どういう訳だか分かりませんが、なつかれまして」

「ええっ？」

ストレートな反応に、小さく苦笑い。

なぜ懐かれてるのか、具体的な理由は警部にも分からないのだ。

苦笑いのまま、きのう抱きついてきたあーちゃんを思い出す。

思わず病室のドアに目を向け……、

警部は、女性刑事が病室のドアを開けていることに気付いた。

そして幼児が飛び出てくる。

幼児の正体は、もちろん。

「……おじさん！」

言うまでもなく、元氣一杯のあーちゃん。

驚いている児童相談所職員の前で。

警部はきのう同様、かがみ込んだ上、取りあえずその子の頭を撫
でた。

第3話 幼女は待ち人を歌う - 2 (後書き)

あとがき

休載の上、一節限りの投稿となりました。
申し訳ありません。

これから、テスト期間のため忙しい時期が続きます。
休載の場合、作者ブログにてお知らせします。

7月24日追記

2度目の削除・差し替えです。

テンポが気になったのと、致命的なところで間違えてたので差し替えています。

日付が変わる前の、第3話 - 3の投稿を目指します。

第3話 幼女は待ち人を歌う - 3

黒の組織壊滅の12年前 12月24日 午前11時10分
緑台警察病院

あーちゃんの事情聴取に来ているのは、児童相談所と警視庁。
言っまでもなく、共に公的機関同士だ。

では、事情聴取の順番はどうなるか？

警視庁も児童相談所も、両方とも公的機関だが、合間で事情を聴くような機関ではない。

合間で聴取を行わないのなら、当然、どちらかが先に聴取を行い、どちらかが後にまわる。

これまで、事情聴取がまともに出て来なかったことへの焦りがあったのだろうか、

少なくともあーちゃんの件に限れば、児童相談所の人間に、警察への遠慮は無かった。

警視庁の人間も、『警察だから先に来たほうを押しつけても良い』とする決まりは無く。

……従って、先に事情聴取を始めるのは、来るのが早かった児童相談所のほうだ。

あーちゃんの病室前の廊下で、女性刑事と警部は、事情聴取の順番を待つ。

職務中にたまたま生じた、待ち時間。

2人の間で会話が繰り広げられても、その話題は、必然的に仕事のことに限られる。

「あの子、今後はどうなるんでしょうか？ 『身元が分かった』とは聞いてますが……」

不意に女性の刑事がそう訊ねてきた。

彼女は、あくまで事情聴取の助っ人だ。

警部達と比較すれば、事件の詳細を知る時間に差は生じ得る。だから警部は、警視庁を発つ前に聞いた事を告げる。

「愛知県警の人間が、あす夕方にこちらに来るらしい。

……先ほど連絡があったそうだ」

「そうですか」

「さすがに今になって、失踪した刑事の一家の子が見つかると思っ
つてなかったらしい。

元々、よく分からないことが多い事件^{ヤマ}だが、よく分からないまま
重大さが増してきているな」

「……そうですか」

女性の刑事は呟き、そのまま黙りきってしまった。

長くない会話はそれで終わり、沈黙が場を支配する。

真相を知りたいのに、分からぬことが多い。

この事情聴取は、事実解明のための貴重な糸口だ。

そういう状況を理解しているから、警部たちは静かに事情聴取の順番を待つ。

……待つこと10分。

「~~~~~!」

言葉になってない、明らかにおかしな声が沈黙を破る。

「「?」」

思わず声のする場所、……あーちゃんの病室を2人は見た。
直後。

病室のドアが開き、飛び出してくる、

「あ〜!」

案の定、本日2回目の飛び出し。
ただし今回は何故か半泣き状態で、警部のほうを見ていないらしい、あーちゃん。

「何があったの!?!」

女性刑事の問う声に答えず、迷走しかける幼児、とっさに警部は前に回り込んだ。

そのままぶつかりそうになり、そこでやっと目の前を見、よろめき……、

今度は、警部の腕にしがみついた。
けれども半泣きの顔は、しがみついてもなお叫ぶのを止めず。

「……何があっただんですか？」

腕にあーちゃんをしがみつかせたまま、警部は病室から出てきた職員に訊いた。

こんな年齢の幼児なら、泣くこと自体は珍しくはないだろう。
しかしこれは捜査だ。

こうなった原因はぜひとも知りたい。

「あ、あのですね」

問われ、地味な職員の片方、メガネの男性が言う。

警部の顔をじっと見て、複雑な顔で。

「どづいつわけか私達には、その、なつかなかったよついでして……」

第3話 幼女は待ち人を歌う - 3 (後書き)

あとがき

結局、日付は変わった後の投稿になりました。
来週もまたコンスタントに投稿できればいいんですけど、
……どうなることやら(汗)。

7月25日

ひどい誤植をいくつも発見、修正しました。

第3話 幼女は待ち人を歌う - 4

黒の組織壊滅の12年前 12月24日 午前11時26分
緑台警察病院

「児童相談所の職員がなだめるよりも、松本警部が頭をなでるほうがずっと効果があるらしい。」

警部の腕にしがみついたままのあーちゃんが落ち着くのに、約5分かつた。

警部はあーちゃんになつかれているが、児童相談所の職員は、どうやらなつかれておらず。

警部がいなければ、事情聴取は出来そうになかった。

病室に大人4人とあーちゃんが戻り、今度は警部が同席した聴取が再開される。

…… 幼児が相手なのだから、聴取というよりも、にこやかなおしやべりなのだ。

警部はやや距離を置いた傍らに立ち、児童相談所の地味な女性職員と、あーちゃんとの会話を聞いた。

きのうも、そして先ほども、事情聴取がマトモに出来ていなかったのか。

児童相談所の職員の問いは、基本的なものから始まった。

あくまで職員はにこやかに、静かに、

「お名前を教えて？」

対する幼児はベッドに座っていた。

笑顔ではないが、機嫌はそこそこ回復した様子で、

「……あーちゃん」

普通に應對するだけ、泣いてしまうよりはマシだろう。
とりあえず取っ付きやすい話題を選んで、会話が続く。

「そう、あーちゃんっていうの。あーちゃんに好きなものはある？」

好きなもの。

少し考え、再度答えが返ってきた。

「おうたがすき」

職員は頷いて言う。

「そうなんだ」

と、今度はあーちゃんが補足するように言った。
質問に答えるのではなく、自主的な発言として。

「ママが、……おしえてくれたから」

ママが好きなのか、それともママが教えてくれた歌が好きなのか。
どちらにしても好きなのだろう、あーちゃんの表情は少し笑みを
帯びた。

職員は更に質問する。
ママについて訊くのではなく、歌について。

「どんなお歌なの？」

長めの沈黙があった。

目を細めて思考し、あーちゃんは口を開いた。

歌を説明するのではなく、実際に歌を歌う。

小さな声で、だが本当にその歌が好きなのだ分かる、幼見らしい歌い方。

歌われたのは、警部が聞いたことがない歌だった。

「……なー、ひいらーきー、つーりいがーねーそあーは、
うーつーくしーく、きょーうーもさいてまーすー、」

突然にメロディーが止まる。

どうやら歌詞を忘れたらしく、懸命になっている様子で、職員の顔を見て、

「それからね……、えっとね、つづきがあるの……」

職員は急かさない。

急かしたところでどうしようもない事だからだ。
ただ相槌を打つように、一言だけ言う。

「続きがあるんだ」

あーちゃんは頷き、すぐに思い出したのか、続きを歌い上げた。

「あーなーたーはいまー、どうーここにいまーすーかー、
あーのそーらかーらー、ほーほおえーみーかーけーる……」

これで、歌は終わり。

あーちゃんはペコリと会釈し、職員は小さく拍手した。

「……良いお歌だね」

そう言われたあーちゃんの機嫌は、良い。

「つりがねそうのうたなの。ひとをね、まつうたなんだって」

職員はまた相槌を打ち、再確認の質問をする。

この歌は、どんな歌だったか。

「へえ、……人を待つ歌なんだ。あーちゃんのママが教えてくれたの？」

「うん」

何気なく、詳しい質問が続く。

「どんな風に教えてくれた？」

これは、警部たち捜査陣にも重要な質問。

あーちゃんがこれまでどんな環境にいたのか、調べる必要性は最初からあった。

あーちゃんの家族のこと、家族を取り巻く環境のこと。
この問いは、それらを聞き出すための、言わば導入部。

だが、答えはこれまでの機嫌からすると、意外なものだった。
あーちゃんはいしばらく考えた後、小さく呟つぶやいたのだ。

「……わかんない」

第3話 少女は待ち人を歌う - 4 (後書き)

後書き

試験やら帰省やらスランプやらで、散々延期した上での掲載となりました。

期間としては短いですが、色々考えたスランプでした。

幕間6と最終話、2つの草稿だけは出来上がっています。

プロットは執筆前から出来上がっていますが、筋はそのまま、プロットを少し変更するかもしれません。

とにかく調子がいい今、ガツガツと書いていくのみです。

先日、拍手画像に暑中お見舞いの絵を載せました。

(今も載せています。～9月末まで掲載予定)

時期が残暑お見舞いの頃になってしまいましたし、コナンとは全く関係のない絵なのですが(汗)。

なお、絵はお持ち帰り自由、転載要許可とします。

10月1日追記

間違っていた歌詞修正

(こんな絵を持ち帰る人が居るのか疑問ですが、一応)

第3話 幼女は待ち人を歌う - 5

黒の組織壊滅の12年前 12月24日 午後13時 緑台警察病院

病室であーちゃんと向き合い、松本警部は心の中でため息を吐く。きのう事情聴取に来た時、あーちゃんは毛利相手に暴れ、やがて沈黙した。

今日は、まず児童相談所の職員相手に暴れ、そして……、何を問うても、『わかんない』と答えるようになった。

児童相談所の職員が聴取をあきらめ、警部達の番になっても、あーちゃんの態度が変化しないのだ。

取調べや事情聴取での会話では、ある種の根気と柔軟性が求められる。

相手がこどもでも、そういう点に変わりはない。

ただ大人相手の会話と異なるのは、突っ込んだ質問や厳しい態度が取れない点。

「本当に……、分からないの？」

「うん。わかんないの」

本当に『分かんない』のではなく、拗ねているのか会話を面倒臭がっているのか、

……とにかく話す気がないだけではないのかと、大人達は皆思っ

あーちゃんは決して人見知りする子ではなく、なつく人間を選ぶ子だ。

本人が意識しているのかは不明だが、あーちゃんの態度の差は大きい。

松本警部は、間違いなくなつかれている人間だ。

この病室にはいないが、看護師もきつとそうだろう。

しかし、そうだとしても会話が長続きするかはあーちゃんの気分次第。

「わ〜か〜ん〜ない……」

「あ……」

あーちゃんの感情が暴走寸前になり、女性刑事が慌てる。

ひよつとしたら泣いてしまうのではないかと恐れて頭を撫でるが、幼児の感情は止まらない。

刑事の手を払いのけ、半泣きの彼女は叫ぶ。

「も、イヤー！ おはなししたくない」

「あ、ああ……ごめんなさい」

……そして大人達は、今日はもはや聴取が不可能であることを悟った。

あーちゃんが泣いたり暴れたりする子なのは、とっくに分かっていた。

収穫ゼロのまま撤収するのは望ましいことではないが、ここまですべて明確に拒否されたらもう無理だ。

半泣き絶叫状態から、ふて腐れて沈黙してる状態にどうにか持っていけばしたものの、これ以上会話を続けようとしたらもっとひどいことになる。

聴取する人間は再び入れ替わる。

病室の隅に立っていた児童相談所の職員2人は、まだここに残るらしい。

今のところ、あーちゃんに一番なつかれているのは松本警部だ。

果たして職員とあーちゃんに、これからまともなコミュニケーションがとれるのだろうか？

「……大変ですな」

一応、病室の扉の前で会釈と一緒にそう言っておく。

対する職員は、2人とも複雑な顔で無言で会釈を返してきて、……警部の足元に目を向けた。

「？」

職員に合わせて下を向く。

どういふ心境の変化なのか、……あーちゃんが警部の服を引っ張っていた。

あーちゃんは、警部の顔を見上げて言う。

「おじさん、みみかして」

「ん？」

意外だった。

もう喋る気はないのかと、そう思っていた。

とりあえず言われた通りにかがんで、耳を貸す。

「あのね……」

あーちゃんは、ないしょ話の形で警部に質問した。

警部は不審に思い、眉をしかめる。

なぜ突然そんなことを言うのか、と。

第3話 幼女は待ち人を歌う - 5 (後書き)

後書き

長らくお待たせしました。

第3話 - 5をお届けします。

前回ああ書いておきながら、また苦しい時期になりました。

長いスランプでした。

未だに快調とはいえませんが、どうかよろしくお願いします。

第3話 幼女は待ち人を歌う - 6

黒の組織壊滅の12年前 12月24日 午後4時 警視庁

「……で、あのガキは何と？」

火災犯係の一角で、松本警部の話を聞いていた弓長警部補は、ごく当然の質問をした。

あーちゃんの事情聴取があまり進展しなかったのは、あまり驚くことではない。

しかし、『あーちゃんがその後、警部に変なことを告げた』と聞けば、関心を持つに決まっている。

毛利刑事は、事件の発端となった例の廃墟に出ているらしい。今朝とは異なり、警視庁に戻って来た松本警部は、弓長警部補と2人で情報を交換することになる。

「あの子は、……」もし、あーちゃんがいなくなったら、たすけてくれる？』と、そう訊いてきた」

あの子と出会った経緯を考えると、笑えない。

「そりゃ、会話を嫌がっていた子供が、突然そう言うのは不自然ですな……」

警部は何と答えたんですか？」

松本警部は、その時の病室の様子を思い出す。

間違いなく、その時自分は戸惑っていた、と思う。

耳を離してあーちゃんの様子をうかがうと、あーちゃんも警部の顔をしっかりと見上げていた。

……戸惑った頭でも、『いなくなったら助けてくれるのか』という問いに、一応妥当そうな答えは思いついた。

これまで同様、その幼児の頭を撫でつつ。

「『おじさんがそうするのは無理かもしれないが、おじさん以外の人がそうしてくれるだろうね』」

「……なるほど」

身元調査が間違いでない限り、遠くない将来、あーちゃんは愛知に移るだろう。

そうなれば、もう警視庁勤務の松本警部が、あーちゃんに接することはない。

もしそこで行方不明になったとしても、搜索するのは愛知県警の者達だ。

と、頷いていた警部補はフト思い出したように顔を上げる。

おめでたい部類で、しかも初耳の情報を、火災犯系の彼は告げた。

「警部、そういうえば先ほど警察病院から、また連絡が来ていましたよ。」

あのガキは明日に退院するそうで……」

「ホオ……」

元々、そう重くない火傷で入院していた子だ。
退院が決まったということは、順調に回復していたということか。

「それにしても気になりますな、そのガキの内緒話。
ただ興味本位で質問したのかもしれませんが……」

『もし、あーちゃんがなくなったら、たすけてくれる？』

果たして、どんなことを思っているのか。

「念のため病室を出てから、児童相談所の職員に会話の内容は伝え
たよ。」

……どうもあーちゃんは、職員にはそういう質問をしていないら
しいがね」

職員に対するこれまでのなつき具合を考えると、まあ納得だ。

内緒話をする分、それだけ松本警部がなつかれているということ
なのだろうが、

その彼でさえ、更に会話をすることは、あーちゃんの様子を見る
と困難そうだった。

だから病院から退散した松本警部は、今、弓長警部補と共に警視
庁で考える。

あーちゃんは、結構重大な火災における唯一の生存者だ。

そしてその生存者は、これまで、どこでどう育ってきたのかが全
く分からない。

新・朱色の君は冬空に歌う～red&snow～

あーちゃんはどこな環境で育ち、今、周囲のことをどう認識しているのだろうか？

第3話 幼女は待ち人を歌う - 6 (後書き)

後書き

すいません。例によって更新がずれました。

今のところ、9月28日までに完結するのが目標です。

この第3話なのですが、実はここで終わるか、7をつけるかで結構迷ったりしています。

小百合さん(原作キャラで松本さんの娘)を出したいんですが、彼女が登場する8巻が手元に無いんですね……。

……どうしよう。

9月18日追記

本文を一部差し替えました。

ストーリー自体に変更点はありません。

第3話 少女は待ち人を歌う - 7

黒の組織壊滅の12年前 12月24日 午後7時30分 都
内某所

車のドアを開けた途端、肌に触れる強い冷気を感じた。
雪降る12月下旬の夜、気温は吐く息が白くなる程度には低い。

警視庁の地下駐車場とは異なり、ケーキ店の駐車場では、風と雪を直に感じることになる。

仕事を終えた松本警部がこのケーキ店を訪れたのは、予約していたケーキを買いに行くため。

彼の、妻と娘が食べるはずのクリスマスケーキ。
警部自身はともかく、妻と娘は、甘いものを嫌うような人間ではない。

妻は1ヶ月ほど前に退院した病み上がりで、娘は高校受験生。
毎年同じ店の物でも、今年のケーキは、2人に対する励ましの意味がある。

特に妻には余計な仕事をさせたくなく、今年は彼がケーキを受け取りに行く決めていた。

もともと、2週間前の時点ではこんな雪を想定しておらず、渋滞が心配だった。

時間ギリギリに駆け込むことや、最悪、時間切れも恐れていたが、幸いなことに到着したのは閉店の1時間以上前。

目の前には強い明りを発する店舗があり、警部は微かに安堵する。

ドアを閉めつつ、空と地面を見た。
雪は、傘を差すほどの降りではないと判断。
それよりも、長期の降雪で荒れ気味の路面に、注意を向けたほうが良いかもしれない。

今日は家族3人、雪を話題にしつつ、夕飯とケーキを食べる
ことになるだろうか。

そう考えると、自然と表情が緩む。

警部は一呼吸置いて、ケーキ店へと歩を進めた。

大げさかも知れないが、彼にとって大切な2人、妻と娘の笑顔のために。

同日同刻 緑台警察病院

「あーちゃん。晩ご飯だよ」

看護師は台車を押しながら、笑顔で病室のドアを開けた。

「ばんごはん？」

あーちゃんは、不審そうな顔。

いつも優しくて明るい看護師だが、今の彼女のテンションは微妙におかしい。

ベッド上にテーブル台を通す看護師の様子を、幼児はじっと見つめる。

「そう。晩ご飯」

看護師は頷き、台車から取り出したトレーを目の前に置く。トレーに載せられているのは、幼児用の食事。成人と比べればずいぶん少ない量の、ご飯と、スープと、おかずと、

「これ、なに？」

看護師は、待つてましたとばかりに答える。

あーちゃんが指したのは、小さな丸い容器だった。ヨーグルトの紙容器に近い見た目だが、中身は別のもの。

「これ？ 特別なお菓子だよ。」

今日はクリスマススイブだから」

「ふーん……」

あーちゃんは反応が薄い。

クリスマススイブ、という行事自体を知らないのか、知ってても関心が無いのか。

「ムースって知ってる？ このお菓子の名前」

あーちゃんは首を横に振る。

「知らない」

「……ご飯食べた後で食べようね。デザートだから。きつとおいしいと思うよ」

その言葉に、やっと機嫌が変わった。
あーちゃんの顔に笑みが広がる。
味を想像したらしい、看護師を見上げ、

「……うん！」

元気よく頷く幼児、つられて看護師も笑った。

子どもの多い病院などでは、サンタクロース訪問などの行事をするところも多いという。

この病院ではそんなことはしないけれども、今日は、子どもにとって特別な日であってほしい。

そういえば。

あーちゃんの食事を手伝う最中、あることに気付いた看護師は窓の外を見る。

彼女が見る闇の空、雪は静かに降り続いていて。

今年は、ホワイトクリスマスかな……。

雪は止まない。

まだ、しばらくは止みそうにない。

第3話 幼女は待ち人を歌う - 7 (後書き)

あとがき

第3話最終話です。次は幕間が入ります。

迷ったのですが、結局小百合さんは出してません。

当初は、父親を見る小百合さん視点の話だったんですが、結果的にこつこつという話になりました。

松本さんは、甘いものをあまり食べない気がします。

病弱な奥さんがいて、娘さんがいて、2人は松本警視(警部)にとつて大切な家族で……。

そういうイメージは湧いてくるんですが、松本警視が甘いものを食べてる情景はちょっと違うかな、と。

で、前回書いたあとがきですが。

……すいません。

28日完結の目標は達成できませんでした。

草稿は出来ているので、これから毎日更新できればいいなと思います。

幕間5 13年後 過去の語り - 3

黒の組織壊滅から9ヶ月後 緑台警察病院

雪が降る日、警察病院の廊下にて。

佐藤と高木に向けた松本警視の語りは、まだ続いている。

「悔しい話だよ。

ワシらは何も出来ず、あーちゃんの歌や質問通りの事件ヤスになったんだからな」

未だ解決していない事件だと、警視は話を始める時に告げていた。つまり、あーちゃんは殺されたか、行方知れずになった、ということ。

警視の失態で『黒の組織』の手掛かりを逃した、と言っただけだから、おそらくは後者。

話の流れからして、あーちゃんがどうなったかは大体想像がつくのだが。

一応確認として、高木刑事は念を押すように問う。

「その女の子は、行方不明になったんですよね？」

警視は即答した。

「そうだ。……愛知県警の人間に会う前に、いなくなった。

『黒の組織』に連れ去られたと見て、間違い無かるう」

やはり。

「……ですよね」

懐かしさも、後悔も、『黒の組織』に対する怒りも、そして、自身に対する怒りも。

多くの感情が入り混じった、過去の追憶。

……部下2人の目前、警視は辛うじて分かる程度に息を吐く。

「あーちゃんは、『もしいなくなったら、警部おじさんが助けてくれるのか』と質問してきた。

まだ、あーちゃんの事件は終わっとらんのだよ」

質問に、答えなければならぬ。

いなくなったら助けられるのかと問うた後、本当に行方不明になった子ども。

あの日あの子が歌った歌の一節のように、あーちゃんの居場所を探す事態になった皮肉。

だから。

「『警察達コソウはあーちゃんを助け出せる』と、行動で答えるのが理想なんだが……。情けない話だな」

あーちゃんはいなくなつたまま。

今でも、警察の理想は、理想のまま。

幕間5 13年後 過去の語り-3 (後書き)

あとがき

拍手画像の暑中お見舞いは、当初の予定通り9月いっぱいまで削除しました。

きのう登録したPixivにはもう転載してませんが、自サイトに
も近いうちに転載すると思います。

幕間6 13年前 ある者の語り - 3

黒の組織壊滅の12年前 12月24日 夜 都内某所

日付が変われば、クリスマスイブの日はクリスマスの日に変わる。

本来、クリスマスは聖者が生まれた日の祝祭だ。

人々は聖者生誕日の祝いとして、あるいはただ単に祭りとして、特別な時を過ごす。

どちらであれ存在するのは、カップルや家族が、言わば暖かな愛を育む時間だ。

とは言っても、必ずしも全ての人間にそんな時間が用意されているわけではない。

世の中には、仕事に忙殺される者がいるし、苦しみに襲われている者がいるし、

……そもそも、暖かな時間を過ごす相手がいない者もいる。

そんなことを考えながら、左の^{まがた}瞼に小さな傷のある男は、手に持った酒瓶の栓を抜いた。

「……まあ、感傷に浸っても仕方ないな」

組織の上層部からあてがわれた部屋の一室で、彼は酒をコップに注ぎつつも自嘲する。

今日の昼にあてがわれたこの部屋には、TVやラジオはもちろん家具類すらも置かれていなかった。

据えられていた家具は、ちゃぶ台、ストーブ、押入れの布団類だけ、という凄まじく殺風景な部屋の中。

左の脛に小さな傷のある彼は、ひとり、まず買ってみた酒を飲む。これまでずっと、数人で祝うクリスマススイブが続いていた。だから今年は、男にとってたぶん初めての、ひとりきりのクリスマススイブ。

ひとり愚痴ったとしても、それはどうしようもないことだった。共に過ごすべき人がもう亡いのなら、新たにそんな人を作らない限りひとりきりになるに決まっている。

「……」

浸りそうになり、思わずもう一杯酒をあおる。

コップの中を飲み干し、ちゃぶ台にコップを戻し、息を吐き、……

「……!？」

そんな時だった。

部屋の扉を叩く荒い音を、彼は聞いたのだ。

左の脛に小さな傷のある彼が応対する前に、扉を叩いた人間が部屋に上がってきた。

部屋に入ってきたのは、見知った、長い銀髪の男。

……もつとも、座って酒を飲む人間を見下ろす視線に、友好的な感情は全く無いと言っている。

明らかな殺気を含んだ冷たい外気が、ただでさえ殺風景な部屋を満たす。

両手に何も持たず、酒を飲んでいた彼は立ち上がった。怒気を発する目の前の人間に、応えなければならぬ。

先日のように襟首をつかまれ、しかしその後は先日とは異なっていた。

「この馬鹿が……！」

罵声と一緒に、握った拳が顔に来る。

部屋に入ってきたジンは、左の瞼に小さな傷のある男を殴り飛ばした。

ちやぶ台の上に倒れた彼に向かって、ジンは容赦なく怒鳴り散らす。

「しれつと協力仰ぎやがって……！」

警察病院にガキが保護されたのは、そもそもお前のミスだろうが……！」

おそらくは、……というか間違いなく、ジンは上層部から事件のあらましを聞いたのだろう。

ジンが事件の経過を調べるのも、その結果激怒するのも、男の予想の範囲内だった。

むしろジンの性格を考えたら、それが当然のはずだった。

警察病院には警備員が常駐している。

幼女の奪還はリスクのある行為で、それを他人の尻拭いのために手伝わされる。

この条件でジンが怒らなかつたら奇跡だろう。

しかしいくら腹立たしくとも、ジンは彼を手伝わなければならぬ。

幼女の奪還を手伝えと上層部に命令されたなら、ジンは逆らえないのだ。

だからなおのことジンは怒り、男に当り散らす。

……そこまで分かりきっていても、ジンの怒り自体を解消する魔法は存在しないのだが。

強いて最善の方法を言うならば、『怒っている時に従順にやり過ぎて』だろうか。

そこまで計算して、倒れた姿勢から正座になる。

ひとりきりではないが決して温かくもない、クリスマスイブの夜。男にとつてのその夜は、怒鳴られ殴られながら、耐える時間として過ぎていった。

幕間6 13年前 ある者の語り - 3 (後書き)

あとがき

ブログを訪問してくださったかたはご存じと思います。

第3話執筆に詰まっている時期に、この幕間だけは先に出来上がってました。

……というか、この幕間があったから第3話 - 7が出来たわけなんです。

この男、何だかんだで一番災難なクリスマスイブの夜を過ごします。

第4話　かくて彼女は消えた - 1

今17歳の子が、4歳の頃の出来事。

その子が、あの時のことを覚えているかは分かりはしない。

一般的に言えば、忘れて当然の話だと思う。

ただ、虫のいいことを言うなら。

……できる限り覚えていてほしいと、思う。

黒の組織壊滅の12年前　12月25日　午前11時30分
緑台警察病院

あーちゃんが予定通りに退院するのなら、警部たちがこの病院に来るのは、今日が最後になる。

当初、助っ人の女性刑事を含めて3人で病院を訪れるはずだったが、だが、刑事が所属する本来の係で他に仕事が出来、彼女は行けなくなっただけという。

もし他に助っ人を呼んでも、助っ人にあーちゃんがなつく保証は無い。

『事情聴取が台無しになるよりは、これまで交流してきた人間だけのほうが、まだいいだろう』

協議はそんな結論に落ち着き、松本警部と弓長警部補の2人だけが病院を訪れることになった。

相変わらず雪が降り続けるクリスマスの日。

病院に入った松本警部は、あーちゃんに出会って以降の事を思う。

あーちゃんに聞きたいことが、たくさんあった。

あーちゃんの家族のことや、あーちゃんの周りのこと、そして捜査が行き詰っている廃墟の火事のこと。

あーちゃんがこの『おじさん』になついているのなら、なおさら。

だが、この日。

「……………」

あーちゃんが入院している病棟に入るなり、2人は違和感を感じて足を止める。

看護師達の様子がおかしい。

むしろ、…………病棟全体が、えらく騒がしい。

「あ…………、刑事さん！」

廊下の向こうから歩いてきた、何だか見覚えのある顔の看護師。彼女が、突然話しかけてくる。

「ああ、…………どうも」

彼女の名前を思い出せず、警部はとりあえず会釈。

名前が何だったか一瞬記憶を辿るも、そもそも知ってるわけが無いことに思い至った。

名前は分からないが、一応、彼女が誰なのかは分かる。

おととい毛利がぁーちゃんに怒鳴った時、病室にすっ飛んできた看護師だ。

看護師のほうも、警部たちが何しに来たかは知っているはず。彼女は少し心配そうな顔で、ある事実を教えてくれる。

「刑事さん。実は、ぁーちゃんがいなくなっただんです」

「……病室を勝手に出たんですか？ 2回目でしょう」

松本警部がぁーちゃんと出会う前、ぁーちゃんは病院内で一度行方不明になっている。

その時は他人の病室で、ベッド下にもぐりこんでいたのだが……

「他の病室も全部探したんですが、見つからなくて……」

だから大騒ぎになっているのか。

警部と警部補は顔を見合わせた。

病院を訪れても、ぁーちゃん本人が不在なら事情聴取は不可能なおかつ、2人はぁーちゃんの顔を知っているわけで。

まあ、搜索の人手が増えて困ることはないだろう。

「搜索を手伝いましょうか？」

警察病院内で、誘拐犯が出没するとは思いたくない。

それこそ警部と初めて出会った時のように、病院内のどこかにひとりでもぐりこんで、寝てるんじゃないか。

「ぜひお願いします。」

……病室にスリッパがあったので、あの子、今、裸足だと思いま
す」

「分かりました」

こうして、あーちゃんの事情聴取はあーちゃん捜索に変更された。

第4話 かくて彼女は消えた - 1 (後書き)

あとがき

いよいよ大詰めです。

この第4話で、大体のストーリーが終わります。

ブログで草稿読まれている方には、もう終わり方が分かっているわけなんです(汗)。

あの読みづらい草稿からどれだけ進歩できるのかが、今のところの課題です。

第3話であーちゃんが歌っている『つりがね草のうた』ですが、作者ブログにて曲の自作midiを公開しています。

midい初制作なので色々とアラがあるかもですが、興味があるかたはどうぞお聴き下さい。

10月12日追記

本文時刻設定を変更しました。すいません。

第4話　かくて彼女は消えた - 2

黒の組織壊滅の12年前　12月25日　午前10時45分
緑台警察病院

相変わらず雪が降り続けている、クリスマスの朝。
いつものように目を覚まし、ご飯を食べて、顔をふいて。
当初と比べれば、病院生活に割と順応した幼児の、入院4日目の朝。

あーちゃんの火傷の治りは順調で、医者は予定通りに退院できると踏んでいた。

退院し、児童相談所に移された後、最終的には故郷なり施設なりに行くのだろう、と。

医者だけでなく看護師も、当たり前だがそんなふうに思っていた。

けども、その予想は結果的に覆される。

児童相談所の職員や、警視庁の刑事が訪問するよりも前。

わずかな隙を計算した上で、事件は発生した。

朝食の後しばらく、あーちゃんは病室で一人きりになる。

無論それは比較的短い時間だし、廊下では看護師たちの往来はそこそこある。

あーちゃんが騒げば、看護師がすっ飛んでくる状況はもちろん維持されている。

だが、

「あーちゃん、おはよう」

そんな時間帯に、突然病室に入ってきた白衣の女性。

ベッドの上の幼児は、疑問を感じて素直に首を傾げた。

この白衣を着た女性を、何と言う職業名で呼ぶかは知っている。

あーちゃんにとって、少なくとも嫌いな人たちではない。

ただ、この女性の顔は初めて見た気がした、のだ。

「かんごしさん？」

「そう、看護師さん」

投げかけられた疑問を肯定し、白衣の女性は微笑んだ。

笑みを変えぬまま、あーちゃんに近づいてくる。

ベッドまで来て、小さな患者着の肩に触れ、

嫌な予感がする。

「ヤッ……」

叫び声が出そうになった。

慌てている看護師の手を振り払い、身をよじり、だが大人の力にはかなわず。

嫌がる顔に押しつけられる白い布。

泣きわめこうとした幼児は、そのまま思いきり息を吸ってしまっ
た。

そして、数秒後。

看護師は、腕の中の幼児が動かなくなったのを確認し、ひとまず安堵の息を吐いた。

薬を嗅がされた幼児は、彼女に抱えられた姿勢のまま気を失っている。

第4話 かくて彼女は消えた - 2 (後書き)

あとがき

きのう、midiの完成版をブログに掲載しました。
最初のもの比べて、色々変更入れています。

さて、この小説もあと4節+2話。
終わり方がベタでも、ここまで来たら最後まで突っ走ります。

10月9日追記

文章のつながりが変だったので、変更入れました。

第4話 かくて彼女は消えた - 3

黒の組織壊滅の12年前 12月25日 10時48分 緑台
警察病院

緊張しているのに、それを態度に出さないよう振る舞うのは難しい。

彼女はトイレ内に他に誰もいないことを確認、個室に入ると途端に気が抜けそうになった。

まだ、与えられた仕事は終わっていない。

自身の心を懸命に叱咤し、床の上に置いていた携帯電話を拾う。

普通にトイレを使う利用者なら、洋式便器の、後ろ側の根元など見たりしない。

掃除の時間にかち合いさえしなければ、そういうスペースは小物の隠し場所になる。

携帯電話の電源を入れ、アドレス帳を開く。

アドレス帳に登録されているのは、ある携帯番号1つだけ。

そこに掛けると、コール1回で相手が出た。

「俺だ」

聞こえてくる男の声。

彼女はどうにか声を出す。

「……準備が終わりました」

果たして男は、彼女の声が震えていることに気付いているのか。ともあれ、簡潔な言葉に対し、同じく簡潔な言葉が返された。

『分かった。計画通りだ』

一言だけの返事。

……一方向的に通話は切れる。

「あ……」

今度こそ本当に気が抜けた。

彼女は、フラフラと便器に座り込む。

冬だというのに心臓が鳴り、白衣の下、全身はつつすらと汗をかいている。

『彼ら』から受けていた指示を思い出す。

やってないことが無いか、意識せずとも、頭の中で何度も確認してしまう。

あの子を眠らせ、ベッドから下ろしさえすればいいのだ、……と
言われていた。

ただし、ベッドから下ろした幼児を、大きなスポーツバッグに入れておけ、とも言われていた。

そのスポーツバッグは、まだ病室の中、廊下から見えないドア下にある。

看護師である彼女からすれば、下準備が大変な、冷や汗もの
為。

しかしそれを承知した上でもなお、『彼ら』はそんなことを平気で要求してきたのだ。

同刻 緑台警察病院前

雪の降る中、コートを羽織りスポーツバッグを抱えた、一人の男が立っている。

左目の瞼に小さな傷のある、ただし今はミラーシールドで傷を隠している、男。

雪が相変わらず降り続けている、クリスマスの日。
病院の建物を見上げると、男の顔には自然と笑みが浮かぶ。

「さあ、いよいよか……」

コートの下、彼はスーツの左胸にバッヂを着けていた。
小さな天秤をかたどったバッヂ。

『組織』が精巧に似せたという、弁護士バッヂの模造品だ。

入院中の幼児を誘拐する作戦は、いたってシンプルなものだった。

友人の子供を見舞うため、病院を訪れた弁護士。

『間違つて他の部屋に入り』、しかも『その部屋でスポーツバッグを取り違える』。

看護師たちが騒ぎ始める頃、弁護士は他人の車に乗って病院を脱出している

チャチな計画だと自覚はあるが、心の中の冷たい興奮は止まらず。
酷薄な笑みを浮かべたまま、彼は歩き始めた。

新・朱色の君は冬空に歌う～red&snow～

まさにそれは、獲物を前にした狩人のような。

第4話 かくて彼女は消えた - 3 (後書き)

あとがき

サンデー本誌では、現在松本警視の絡む事件が進行中。
原作での事件が終わるまでには、……いくら何でも、これを完結
させたい作者です。

残り3節+2話。
頑張ります……。

10月10日追記

投稿後に誤植発見。直しました。

第4話 かくて彼女は消えた - 4

黒の組織壊滅の12年前 12月25日 午後11時20分
緑台警察病院周辺

「あーちゃん、あーちゃん」

呼ぶ声の下、身体を強く揺すられた幼児は眼を覚ます。
無意識にあくびが出て、ゆっくりと目を開ける。

何が起きたのか、よく分からない。
目を覚ましたら車の中で、着ている服も変わっていて。

「おはよう。あーちゃん」

……知り合いの『おじさん』が、目の前で笑っていた。

幼児が、以前から懐いていた『おじさん』。
病院で出会った『おじさん』とはまた別の、なかよしな『おじさん』。

幼児の見方では、『おじさん』同士は似ているように思えた。
大きさも位置も違うけれど、2人の『おじさん』は、目元にそれぞれ傷がある。

仲の良い『おじさん』に似ていたから、病院の『おじさん』に懐いたのだけだ。

そんなふうな幼児の頭でも、今の状況が変なのは何となく分かる。

雪がちらついているほど気温は低いのだから、どうしようもなく寒いだろう。

遠くまで行ってなければいいんだが……

心の中で呟きつつ、松本警部は警部補と別れ、病院の近くの道を走る。

2人別々に探したほうが範囲は広がる、効率を重視した判断だ。

主な搜索範囲は、他人の気配がない道路。

大人が見れば、すぐ通報するであろう格好の幼児。

逆に人の目につかない場所にいるなら、いつまでたってもあーちゃんには保護されない。

「あーちゃん、あーちゃん！」

車1台通れる幅の路地を、名を呼びながら警部は進む。

電信柱の下、寒さでうずくまる患者着姿の幼児がいなかった、いちいち確認しながら。

焦り、息を吐き、歩を進め、

……その時。

「な、かおる……そうに……」

子どもの歌う声を聞いた。

「……！！！」

聞き覚えのある声にピンときた。

新・朱色の君は冬空に歌う～red&snow～

声のするほうに走る。

角を曲がると、数メートル先、
何故かセーターにスカート姿のあ
ーちゃんが立っていた。

第4話 かくて彼女は消えた - 4 (後書き)

あとがき

10月11日朝、8時に起きるつもりが、実際に起きたら何と正午でした。

……学校に行かない日なので、目覚ましをかけてなかったのが原因のようです。

やること為すこと色々ずれ込んで、日付が変わってしまってます。ブログでは11日昼以降の投稿と宣言したんですが……。本当に申し訳ありません。

なお、第4話 1の時刻設定ですが、ちょっと変な齟齬が出たので訂正入れさせてもらいました。

投稿後追記

すみません。場所と時刻の設定を入れ忘れてました。

第4話　かくて彼女は消えた - 5

黒の組織壊滅の12年前　12月25日　午後11時47分
緑台警察病院周辺

セーターとスカートでは少し寒かったが、我慢できないほど冷たくはない。

道路の真ん中で立ったまま、……退屈だったから、『おじさん』に言われたように、歌を歌おうと思った。

何を歌うかは、深く考えずに決めた。
きのう病院で歌ったのと同じ、『つりがね草の歌』にしよう。

「……はーなー、かあおーるー、つーりいがーねーそおーに、
おもーいこーめー、はあーなしーかーけーまあすー、」

冬空の下、幼児は歌う。

この歌は、母親と、姉に教わった歌。
人の無事を祈り、人を待つ歌だという。

もつとも、約4年の人生の中で、本気で人の無事を祈った記憶は無い。
内容に実感が湧かず、歌詞を深く理解しているわけではないけれど。
綺麗なメロディーだったから、一番のお気に入りだった。

……お気に入りだからこそ、歌を習った思い出は、心の中にある大切な宝物。

人に話さず、隠しておくべき宝の記憶。
病院で『分かんない』と言ったのは、そう言えば追及されないことを知っていたからだ。

「いーのーりーながーらー、おおーもいだーしーまーすー、
ゆーめーのおーよおなー、たあーのおしーいひーびーをー」

大声で歌っているから声は響くが、今、その歌を聴く者は、周囲にはあまりいない。

少し離れた道路上、『おじさん』が、ひとりニヤニヤした顔で立っているだけで。

しかし。

「あーちゃん！」

歌い終える最後の数秒、幼児は別の人間の声を聞いた。
間違いなく幼児の通称を呼ぶ、必死な声。

びっくりして声のするほうを見ると、どういいうわけか、病院で出会ったほうの『おじさん』がいる。

その『おじさん』は、これまで見たことないくらい真剣な顔で。

「おじさん……?」

呟いた後の数十秒。

幼児の目の前で、あらゆることが動いた。

「あーちゃん！」

考えるよりも前に名前を呼んだ。
松本警部の目の前、数メートル先に立つ幼女。

服装の変化には一瞬戸惑ったが、目の前にいるこの子が『あーちゃん』なのは違いなく。

細かいことはこの場では考えずに、ひとまず保護のため走る。

「おじさん……？」

当のあーちゃんは、明らかに目を白黒させていて。

後から振り返ってみれば。

よく考えるべきだった。

なぜあーちゃんの普通の服を着ていたのか。

あーちゃんを連れ去った奴らが、服を着替えさせたのだと。
そんな可能性に、すぐ気付くべきだった

そして。

前触れもなく、突然に何もかもが動く。

突如後ろから来るエンジン音、

振り向く間もなく、

近づいてくる、

「……！」

あっという間の衝撃。

わずか数瞬で、意識が飛んだ。

「大丈夫？」

左の瞼に傷のある男　もうひとりの『おじさん』　は、道路に立っていたあーちゃんを抱え上げた。

腕の中の幼児が驚いて見つめる下、警察関係者らしきスーツ姿の大柄な中年が倒れている。

車での跳ね飛ばし方からして、きっとしばらくは動かないだろう。念のため、倒れている男の意識が無いのを目視で確認したあとで。

あーちゃんを抱えたまま、車の運転主たるジンに一礼した。

第4話 かくて彼女は消えた - 5 (後書き)

あとがき

残り1節+2話。

調子が良ければ今週中に終わります。……たぶん。

『勢いのいい』描写が上手くできればと思うんですが、どうも力不足の感があります。

今現在の書き方が、見たまま私の実力なんですが。

学校行事のおかげで丸1日休みだったのに、書けたのは、この話と終話の一部だけ。

停滞するよりかはマシなんでしょうけど、調子の波は今どうなっているんだろうか、自分のことなのに首をひねっています。

投稿後追記

載せた後で誤植に気付いて訂正入れています。

第4話 かくて彼女は消えた - 6

黒の組織壊滅の12年前 12月26日 午後1時30分 緑
台警察病院

「……刑事って、怪我しやすい仕事ね」

まあ仕方ないけど、と、松本小百合（15歳）は呟いた。

守秘義務があるから、どういいういきさつで父が負傷したのか、詳しいことは教えてもらえない。

それでも娘から見て、やたら大変な仕事だという印象はある。

以前、職務上のケガとかで、父は左目に大きめの傷を負った。
今回も職務上のケガで、……どうも車に跳ね飛ばされたらしい。

最近やっと母が退院したと思ったら、今度は父の入院。
もつとも、治る見込みは最初からあるから、母より状況は良いの
だけ。

「仕事中にうつかり死なないですよ。父さん」

冗談めかした言い方でも、一番念押ししたことだった。

縁起でもない話だが、父が突然死んだら、病弱な母までショック
で倒れかねない。

刑事として仕事熱心なのは十分理解しているが、殉職されると一
人娘が困る。

「うむ……」

病室のベッドの上、警部である父親は渋い顔。
娘の心を理解してるのかしていないのか、……小百合は心中でそ
っと溜め息を吐いた。

幸か不幸か、父の入院は冬休みと重なっている。

退院するまでの時間はそう長くないだろうが、毎日見舞いに来る
ことになるだろう。

……と、そこで。

ドアのノック音。

「はい、どうぞ」

声に応じてドアが開き、大柄なスーツの男性が入って来た。

父の反応を見ると、……どうやら警視庁の同僚らしい、小百合に

『出て行け』とジエスチャー。

警察同士の会話を盗み聞きする趣味などなく、父に素直に従って
病室を出る。

こつという時の退屈の解消法も、母の入院でとうの昔に身に着けて
いた。

病院ロビーの自販機で、あつたかいレモンティーを買うに限る。

見舞い兼報告のために病室を訪れた弓長警部補は、明らかに落胆
していたようだった。

さすがに幼児捜索は火災犯係の仕事ではないのだが、事件の鍵を

握っている子どもがいなくなったら悔しかろう。

もちろん、悔しいのは松本警部も同じこと。

まさかこの病院に、自分が入院する羽目になるとは思わなかった。

きのう松本警部は、あの路地の真ん中で倒れていたところを、あーちゃんを捜索中の警察官に発見された。

発見時に意識はあったが、車に当て逃げされた痛みで、一人では動けない状態。

肩を借りつつ病院に戻ったら、足と腰をやられているから即入院と診断を受けた。

「結局、あーちゃんはまだ行方不明、ですか……」

「ああ」

怪我をした瞬間を思い出し、痛みに顔をしかめ、ごまかすように外を見た。

天気予報通りに雪が止んだ窓の外、病室からは見えないが、現在警察官たちが大量動員されているらしい。

何せ、警察病院から退院間近の子供が消えたのだ。

いずれ発見されると信じたいが、あーちゃんが誰に連れ去られたのか、松本警部が見ていないのは痛い。

車に跳ね飛ばされた瞬間からしばらく、おそらくは数分間、松本警部は意識を失っていた。

「……何か、動きは？」

自身の失態を心の中で噛みしめて、なお、警部は問うた。
警部補の側も、何か言いたかったことがある様子で。

「今朝、警視庁に匿名の投書が来しました。
内容からして、おそらく廃墟の火事の物だと」

何を指しているかは、すぐに知れた。

あーちゃんが火傷を負ってここ入院した、最初の火災。

もっともあーちゃんだけでなく、2つの遺体も一緒に見つかった
のだけだ。

「文面は？」

「『22日の火災での遺体、腕の無いほうは六鷹茅乃のものだ』。

……ワープロ打ちの文面でした。今、解析をかせせています」

あの廃墟で見つかった2つの遺体は、共に、ひどく損傷を受けた
女性体だった。

首が無い遺体は、指名手配されていた連続強盗殺人犯と判明。

腕の無い遺体は、……まだ身元が分かかっていなかったはず。

遺体の損傷について、今のところ具体的な公表は控えられている。
従ってそんな手紙を送ることが出来るのは、捜査関係者か、ある
いは、

「事件に関わった者、か。

で、誰の遺体だと？ あーちゃんの名字も同じ、『六鷹』だった
はずだが」

先日、警視庁で聞いた情報。

あーちゃんの両親は、愛知県警刑事の父と、元婦警の母で。

「ええ。六鷹茅乃はあーちゃんの母親です。」

……あーちゃんの身元捜査が間違っただけならば、の話ですが」

「そうか……」

呟き、沈黙が生じる。

大事なところで、大切な子を失った。

事件を起こした者よりもむしろ、失態を犯した自分自身が腹立たしかった。

第4話 かくて彼女は消えた - 6 (後書き)

あとがき

最後まで迷いましたが、結局小百合さんは出しました。
レモンティーが好きな設定は原作準拠です(第8巻)。

さあ、残りは終話2つ。

時は組織壊滅後に移ります。

終話 13年後 過去の追憶 - 上

黒の組織壊滅から9カ月後 緑台警察病院

彼女の身体は特徴的だ。

高い身長、視力の無い上に赤い右目、よく判らぬ性別。

……今、目だけは、借り物のミラーシェードで隠しているの
だけだ。

冬空の下、降る雪の中。

スーツにコート姿の彼女は、ただ静かに警察病院を見上げていた。

彼女の名は、むつたかあやの六鷹綾乃。

幼い頃の通称は『あーちゃん』。

当時から一応女性扱いのまま育ち、現在17歳の、冬。

貴重な休日を使ってこの病院に来たのは、別に診察を受けるためではない。

あえて言うなら、自身の好奇心を満たすため。

自身が関わってきた場所に、純粹に興味があったからだ。

『黒の組織』出身者の上司は、どういふ気まぐれか、彼女の好奇心に理解を示してくれた。

今は他の場所に停めた車内で、彼女を待っていてくれる。

緑台警察病院。

今年の春、肉親が死んだ場所で、かつ、ずっと前に火傷で入院した彼女が、警察と接点を持った場所。

しかし入院した本人だというのに、後者の記憶は曖昧だった。当時わずか4歳だったのだから仕方がないだろう。

彼女が今でも、わずかに、わずかにだが覚えているのは……
炎の中で感じた腕の痛みと、頭を撫でられた記憶、のみ。

……不思議だと彼女は思う。

燃え尽きた後の廃墟に入って火傷したはずなのに、なぜ炎の中にいるのか。

もし本当に炎の中にいたとしても、なぜ両腕の火傷だけで済んだのか。

不思議なことは、それだけではなかった。

実母が焼死したらしい火事だというのに、そもそも、なぜそんな火事場に実母がいたのか。

警察病院を退院した直後、彼女自身は右目を失明したらしいが、一体どんな経緯で右目の失明に至ったのか。

それらの疑問は、昔から疑問に思っていて、今でもよく判らぬこと。

よく判らぬままだが、彼女はこれまで懸命に考えてきた。

幼い頃から、彼女の周りには大人たちがいたのだ。

大人たちの色々な思惑があり、争いがあり、それらに基づく勢力の力学があり。

13年前、4歳児だった彼女は無力だった。

おそらくは、元婦人警官だったという、焼死した母親も。

無力だったから『黒の組織』の大人たちの都合に振り回され、火事に巻き込まれた。

13年後の今、17歳の彼女は無力なままだ。

勢力の力学の中、どういいうわけだか彼女が育った『黒の組織』は壊滅してしまった。

組織が壊滅したことが、良いことなのかどうかは分からない。ただ、組織に依存せず生きる機会を得たのだとは思う。

生きたいのなら、力を持つ他人に怯えてはならない。

生きている以上、他人との関わりからは逃げられない。

力が無いのなら、せめて。

他人の意思を見透かすだけの、賢さを。

生き抜くための、精神的な強さを

病院を見上げる彼女は、ただ息を吐く。

視界が曇っているのは、ミラーシールドが寒気に触れているから、
……だろうか。

こんなことで泣いてはならない、そんな感傷に浸るために病院に
来たわけではないのに……！

「……っは」

目元に手を当てて、涙を流していないのを確かめると、彼女は病

院に背を向けた。

この病院は、彼女の肉親が死んだ場所。
そしてそれよりずっと前、彼女が警察と接点を持った、人生が変わるかもしれない場所。

……それなら。

ある願掛けを思いつき、ミラーシールドの下で彼女は目を閉じた。
きつと自分にとって支えになるような、小さな決まり事だ。

いつか、この病院にまた来よう。

私の望みが叶った後で。

小さな決意を胸に秘めて、帰りの道を彼女は歩く。

望みが叶うのかは分からない、これは下らない願掛けだ。

下らないことだと自嘲しながらも。

彼女は心のどこかで、この願いが叶うことを望んでいた。

決意を秘めたまま、上司の元に戻る。

そう遠くない駐車場に軽自動車を停めて、彼は待っていてくれた。

「……ああ、どうだった？」

問いつつ、上司はゆっくりとあくび、そして小さく伸び。

どうも寝起きらしい、というか、本当に寝ていたとしか思えない。

ひとりきりで寝るとは職業の割にえらく物騒だな、と思うが、あ

えて言わず。

助手席に座ったあとで、ただ単に彼女は肩をすくめた。

「……どうもしない。門の前から建物を見ただけだ」

言いつつ、身に着けていた借り物のミラーシェードを外す。

もともと貸し手のほうから提案してきたのだ、返して困る物でもない。

「ふうん」

彼女の横で、上司は小さく口角を上げる。

聞きようによつてはただの生返事だが、葛藤を見透かして面白がられているような印象を抱き、……彼女は怪訝な顔で上司を見た。

滅多に素顔を見せぬ上司の顔、左の瞼には小さな傷がある。

終話 13年後 過去の追憶 - 下

黒の組織壊滅から9カ月後 緑台警察病院

「……あーちゃんが連れ去られたこと自体は、13年前から分かっていたのだよ。」

最初に言った通り、『黒の組織』の関与が分かったのは、今年の春だった」

「そうなんですか」

高木は、とりあえず相槌を打った。

上司の失態話自体に関心はあるが、その失態を責めたり同情したり出来るような人間ではないと自覚がある。

仮にそういう人間であっても、本人が過去を悔やんでいる状況で下手なことは言えない、……気がする。

「渉君。その、……あーちゃんの家族構成に聞き覚えはない？」

佐藤美和子の突然の問い。

軽く困惑しつつ、記憶を辿った。

「え？ えっと、愛知県警の一家ですよね。」

刑事の父親、元婦警の母親、それから長男と長女と、戸籍に名前と性別が無い3番目の子ども……」

指折り数えて言っと、今度は警視が言う。

まるでヒントのようじに、

「その一家が失踪したのは17年前の10月だ。子どもはそれぞれ、5歳、3歳、0歳。」

2番目の子は、生きていれば今何歳だ？」

「20歳です……。あ……。！」

単純な計算で思い出した。

愛知出身で、逮捕されて、しかし成人を迎える前に死んだ女の子

……！

警視は頷き、しつかりと言う。

「そう。あーちゃん自身は捕まっていないが、あーちゃんの姉は捕まっていたんだよ。」

組織の壊滅時にアジトに放火、火傷で入院、……拳銃、この病院から飛び降り自殺したがね」

確かに覚えている。

病院側の警備をどうやってかいくぐったのか、謎のまま死んで問題になった女性がいた。

高木自身は『黒の組織』の別の事件に関わっていて、よく知らなかったが。

「この病院で、生前にその姉が証言した。」

それで発覚したんだよ。……あの火事やあーちゃんの連れ去りに、黒の組織が関わっていたんだと」

警視の目前、高木刑事は目を瞞^{みは}っている。

当たり前の反応だった。

あーちゃんの姉は、『黒の組織』壊滅後の一時期、散々評判になっていた自殺者なのだから。

「13年前の火災での、両腕の無い遺体は、確かにあーちゃん達の母親だった。

……あーちゃん達の父親も、どうも既に死んでいるらしい。

姉もここで飛び降り自殺したが、……あーちゃんの兄と、あーちゃんは、生きている可能性が強い」

あーちゃんの姉、信乃しのと向かい合った時のことを思い出す。

凶悪な放火犯には見えづらく、飛び降り自殺したことも不思議に思える、若い女性。

柔らかい、フワフワしたような喋りかたで微笑んでいた女。

あーちゃんが綾乃という名で、女扱いで育っていることを、初めて教わった。

13年前の火事の直後、あーちゃんは右目を失明したらしいという、そんな話も。

後悔の念がある。

あの時車に跳ね飛ばされなければ、何もかもが変わっていたのではないかと。

あーちゃんが、『黒の組織』に連れ戻されずに済んだのではないかと。

そして心配の念がある。

どこかで生きているらしいあーちゃんと、その兄に対して。

死ぬことと罪を犯すことが、当然な世界に居続けるのだから。

六鷹一家は17年前から、そんな世界に引き込まれていったままなのだ。

「君達はそうならず、……良い家庭を作りなさい」

2人の部下はハツとして頷いた。

高木と佐藤はもう結納済み、もうすぐ入籍するカップルだ。だからこそ、……警視が言うことにも意味がある。

窓から、舞う雪を見た。

あの日、冬空の下で歌っていた幼女を思い出す。

当時、警部だった彼がその女の子に出会ったのは、13年前の冬。この緑台警察病院での出来事で、当時の女の子の年齢はわずか4歳。

懐かしくもあり、苦々しくもある、4日間の思い出。

終話 13年後 過去の追憶・下（後書き）

次は、あとがきと雑多なデータ集です。

終話上下とデータ集は、ほぼ1日で制作しました。

つ、疲れた……

あとがきと雑多なデータ集

こんにちは、作者の汀です。

DCNでは更新ごとにグダグダ喋ってましたが、自サイトではそういうこと書いてなかったからなあ……

というわけで、サイトとDCNの両方に掲載する解説というかデータ集を作ってみよう、と思い立ちました。正直、人によってはどうでも良いシロモノだと思われます。

・あーちゃんが歌っていた『つりがね草のうた』について

原題は『The Blue Bells of Scotlan
d』、日本語では『スコットランドの釣鐘草』と訳されます。

題名の通りスコットランドの古い民謡で、原詩は戦地に立った兵士を讃え恋人を想う内容です。

日本では、明治14年頃、稲垣千穎によって『美しき』というタイトルで紹介されました。

この『美しき』、戦前は教科書にも載っていた時期があったようですが、恋人描写無し、すごい忠君愛国の歌になっています。

時代が時代だからでしょうか……。

私ざつと探したところ、稲垣千穎以外にも、門馬直衛、堀内敬

三、水木孝一、志村建世の訳があるようです。

この小説では水木孝一訳を使用しました。

先日、ブログにてこの曲の自作midiを公開しました。

携帯からは聞けないようですが、PCで興味をもたれた方はどうぞ。

(<http://sateisyouseitukan.blog.shinobi.jp/Entry/187/>)

・ふたりの『おじさん』について

片方はオリキャラ、もう片方は原作キャラ。

目のあたりの傷が『似ているおじさん』としたのですが、連載終盤のサンデーを見てびっくり。

原作キャラのほうの細かい設定が開示されています（サンデーネタバレ回避のため、詳細は言いません）。

……いやしかし、小説のほうに影響が出るんじゃないかとヒヤヒヤしました（汗）。

サンデーと小説を突き合わせて矛盾が出るようなら、もちろん修正入れる気でいます。

まだサンデーのほうは終わってませんが、最終的にどのくらいネタが被るかが気になってます。

・あーちゃんの性別について

『部分型アンドロゲン不応症による男性仮性半陰陽』。

……大半の方にはサッパリだと思えます。

私も調べるまでそうでした（爆）。

『男性仮性半陰陽』とは一般的に、『染色体はXYだけど身体が女性に近い』状態を指します。

『アンドロゲン不応症（AIS）』は、別名『精巢女性化症候群』

胎児の時期、胎児の精巣を形作るホルモンが正常に出ていても、そのホルモンの受容体が働いてないことを指すそうで。

ホルモンの受容体が全く働いてない〃〃完全型アンドロゲン不応症〃〃。

ホルモンの受容体が多少働いている〃〃部分型（非完全型）アンドロゲン不応症〃〃。

医学的には、以上のようなカテゴリーのようです。

特に完全型の場合、見た目が完全に女性のため、成人後になるまで気づかない人もいるとのこと。

アンドロゲンの異常以外にも、男性仮性半陰陽となるパターンはいくつかあります。

半陰陽は、原因や症状なんかが本当に人それぞれだそうです。

（参考文献：上川あや著『変えていく勇気』岩波新書；ウィキペディア；gooヘルスケア；病気の基礎知識大辞典 など）

・小説の反省点

私の調子次第で、更新スピードがコロコロ変わってました。

8月末に終わる予定だったんですが、完全な皮算用になっちゃってます。

実は11月の同人誌即売会で、この話を無料小説本として出す野望もありました。

当然、断念しましたが（もう即売会の募集期間が終わってる……）

あとは、描写力の不足とか語彙の乏しさとか、色々改善したいものがあります。

……無理な背伸びでスランプになった前科持ち、なんですけどね。沢山のものから一杯学んで、どうにかしてみたいなあ、と思ったり。

・小説の時系列・その他設定等

確か幕間2までは、小説の時系列を作成していました。

さすがに完結しましたから、終話までの時系列を改めて作るつもりです。

これまで同様、ブログにて掲載することになります。

最終的な人物関係図は、この小説の目次ページ（DCNは拍手コーナー）にて掲載しています。
興味があるかたはどうぞ。

・次に書く話

今回と同じく、『イロ者少年少女シリーズ』を書きます。

2作品の同時連載が出来ればいいかなあ、なんて思っていたり。無理だったら、絶対書く決めている作品の単独連載ですね。

死刑間違いなしと言われている殺人犯の元刑事、彼を逃がそうとするオリキャラの少女、2人に関わる色黒探偵……、

舞台は夏の大阪、決断を迫ったり迫られたり、逃げたり逃がしたり物語。

春に募集した定義文、遅くなりましたがようやく出ます。

新・朱色の君は冬空に歌う～red&snow～

……と、これで書きたいことは以上です。
これまで読んで頂き、本当にありがとうございました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7192a/>

新・朱色の君は冬空に歌う～red&snow～

2009年5月9日07時00分発行